
悪がまさに

柳秋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪がままに

【Zコード】

Z3860Y

【作者名】

柳秋

【あらすじ】

不条理に動き歪む世界、荒さんでいく人々の心、そして欲望に支配された街・東京23区。導かれたかのように、ある男が再び姿を現した。皮肉にも、運命の歯車が動き始める……。

悪がままに生きる者達が互いに引き寄せられ、最悪のクーデターへと発展する。しかし、それはほんの序章に過ぎなかつた……。己の信念を貫く23人が、運命に導かれていく……。

～プロローグ～（前書き）

この作品はフィクションであり、実在する人物名、地名、団体等など一切関係ありませんのでご了承ください。

「プロローグ」

西の空が赤く染まり、鴉の鳴き声が聞こえている。

学生服の着こなし方を覚えた幼い二人は、いつものように小さな公園のベンチに座っていた。学校での出来事や友人の話など他愛もない会話をしていると、不意に真剣な面持ちで優香は翔を見つめた。

「翔、大好きよ……」

あまりにも唐突だったので驚いたが、その後に見せた優しい笑顔が何よりも好きだった。

「俺もだよ」

優香の目を見て真剣に答えた。顔は強張り引き攣っている。苦手な笑顔を作ろうとしたらしい。そんな精一杯の姿を見て優香はキスをした。ベンチに寄りかかり、薄暗い空を見上げている。

「大人になつた翔つてどんなだろ？」

「変わらない気が（んつ、これは……）」

何とも言えない感覚に襲われていた。

「そうだよね。どんな事があつても変わらないでね……」

足元を見ながら寂しげな表情で話し続けている。翔は嫌な予感が脳裏を過ぎり、話を止めようと必死になつた。

「ちょ、ちょっと待つてくれ……」

「今日はもう帰るね……」

田の前にいるはずの優香が透けて見える。翔は何度も瞬きをしていふと、優香はゆっくりとベンチから立ち上がり無言のまま遠ざかって行く。

「くっ、ま、待てって……行くな……」

抱きついてでも止めようとするが、思つよつに体が動かない。遠ざかる背中から、聞こえるはずの無い声が心に響いた。

「もう……自分の……人生を……歩んで……」

辺り一面が暗闇に包まれ、優香の姿が吸い込まれていく。翔は無我夢中になつてもがき続けるが、何も変わらない。

「つま……（我に眠りし……）くうつそお……動けつ……」

離れていく背中を見つめる事しか出来なかつた。

「うわあつーー！」

布団を抱きかかえ上半身を起こしていた。日の出前なのか、静けさの漂う暗い部屋で一人呆然としている。氣づくと大粒の涙が髪を濡らしていた。

第1話 噂～Bar Change～（前書き）

この作品はフィクションであり、実在する人物名、地名、団体等など一切関係ありませんので、了承ください。

第1話 噂～Bar Change～

練馬区・Bar Change

翔の親友・昌也が経営しているBARである。

人通りが激しい大通りから、一歩外れた雑居ビル。その1階に店を構えていた。飲食店を営むには最適の場所とは決して言えない立地だ。態と覗けるようにしたガラス張りの入口からは、左手に8席のカウンター、右手には4人掛けのテーブルが3つ置かれているのが見える。地道な営業活動と人当たりの良さで、店は連日賑わいを見せていた。

日が沈み、ちらほらと常連客が顔を出していいる。昌也はカウンタ一越しに接客をしていると、携帯電話が鳴った。忙しい手を止めポケットから取り出す。

「はい……」

キッチンに向かいながら何度も応答するが、相手は沈黙を続けている。誰からか確認しようと、携帯画面に日を向けようとした瞬間だった。

「誰だつ！！」

相手の言葉に一つ間を置き日を瞑つた。聞き慣れた懐かしい声に、思わず頬が緩んでいる。

「お前から掛けてきて誰だとは何だ！！…………元気にしてんのか？」

「おーよ、久しぶりだな。今、羽田に着いた……」

電話の主は、親友の翔からだつた。

「……はい！？ お前帰つて来たのか？」

「おひ、そろそろ頃合かと思つてよ……」

「……バカ、長すぎだよ。10年だぞ10年」

「まあまあまあ、そーゆーなつて。といひでお前は……今何してんだ？」

「2年前に開業したB A Rを……」

「うおっ……後で行くからよ。じゃあな……」

「お、おい……切りやがつた。店の場所知らないくせに……」

相変わらずの身勝手さに目を細め参つた表情を浮かべている。だが、久しぶりの再会に心は躍つていた。

数時間後。

……カラーン。鈴の音が鳴り響き、いかにも悪そうな面構えをした4人組の男と誰かの彼女であるうつ女が来店してきた。二十歳を超えて間もない年頃だろうか、昌也は何気ない表情で見ていた。

「いらっしゃいませ！」

女性店員の径子はカウンター席に案内している。男達は相手を威嚇する様に歩いてるので、常連客は一斉に目を逸らした。席に着くや否や今日の出来事であるうつ話を始めた。

「翔さん、やつぱ強いつすねー」

一番端に座つてゐる男が口火を切つた。昌也はカウンター越しにグラスを磨きながら聞いている。

「あいつらの逃げっぷりは最高でしたよ」

「さすが、東京【五虎将】っすよね」

翔と呼ばれている男を持ち上げながら話が進んでいく。煙草に火を点け、男も満更でもない表情をしていた。女は見惚れた様子で見ている。おそらく彼女である。

「でも、大丈夫なんすかね。やつら【侠狼会】だつて言つてましたけど……」

「その名前を出せば俺たちがびびると思つて言つたんだろ……それより、持つて来たんだろ? な?」

「あつ、はい。どうも、ありがと「ひじぞー」ました! !」

手渡された包みは明らかに大金だと見て取れた。男は手馴れた手つきで中身を確認し、不敵に微笑んでいる。

「まつ、何かあつたら連絡くれよ」

「はい、よろしくお願ひします! !」

3人は翔と呼ばれている男を囲むように席を離れ、頭を下げてお礼を言つている。終わるや否や、注文もせずにそそくさと帰つて行つた。帰る様を見ていた径子や常連客は、啞然としている。

男は優越感からか女を意識してか、格好つけて珍しい名前のカクテルを注文した。しかしそれは、ノンアルコールカクテルだ。知つているのか知らないのか。聞き間違いかと不安に駆られたバーテンダーが確認をしている。そんなやり取りを見ていた常連客がクスクスと笑つていて。押し問答が始まりそうな雰囲気だ。

昌也は話題を変えようと口を開いた。

「失礼ですが、お密せんつてあの有名な『翔』さんですか？」

突然の質問に、男は不機嫌な顔をして昌也を見た。

「…………だとしたら？」

「いやあ～、そろそろ帰られた方が…………」

「何だと…？」

立ち上がり物凄い形相で睨みつけた。

「あっいやっ、そろそろ…………」

相手を怒らせてしまい慌てた昌也は、理由を伝えてなだめようとした時だった。……ガラン、鈴の音が強く鳴り響いた。

第2話 噂 ～つまんね～（前書き）

この作品はフィクションであり、実在する人物名、地名、団体等など一切関係ありませんので、了承ください。

第2話 噂 ～つまんねーの～

大田区・羽田空港

時は少し遡る。

羽田空港に到着した翔は、第2ターミナルのソファーに腰掛け電話をしている所だった。

「……バカ、長すぎだよ。10年だぞ10年」

「ピーーン、ピーーン。耳元で何かが鳴っている。

「まあまあまあ、そーゆーなつて。といひでお前は……今何してんだ？」

「ピーーン、ピーーン。その音は鳴り止まない。

「2年前に開業したBARを……」

「（んつ）うおつ……後で行くからよ。じゃあな……」

「お、おー……」

「ピイーーーー。」

「切れた……」

充電が無くなつたようだ。携帯片手に悲痛にも似た雄叫びを放つ。混雑しているターミナル、周囲の人々は係わりを恐れ翔の居場所を避けて歩きはじめた。

「まついいや……」

氣を取り直して立ち上がつた。これといった手荷物は無く、手ぶらのまま羽田空港国内線ターミナル駅へと歩きだした。

ターミナルの広大な景色を眺めながらしづら歩いていると、政治家と思われる人物が記者団に囲まれてゐる。好奇心旺盛な性格からか、テレビカメラに映るうとわくわくしながら向かつた。

「カメラだけかよ……つまんねーの」

不機嫌な表情を浮かべている。テレビカメラが1台も無い事が気に入らなかつたようだ。興味が無くなり駅に向かつて歩き出した。

「……首相の参拝に対して……ありますか？」

無言のまま立ち去るうとする政治家に、記者団から次々と質問が浴びせられている。必死で守る秘書の姿が痛ましい。

翔は品川駅に到着していた。山手線へ乗り換える為、構内を歩く。各方面への中継地点として役割を担うこの駅は、時間帯を問わず大勢の人々が行き交う。真っ直ぐに歩く事などまならない状態である。

人の波にのまれ歩いていると、突然、目の前が開けた。視覚障害者の男性が白杖を突いて歩いて来たからだ。翔も道を譲りすれ違う。「すいません、ありがとうございます」

「んっ？」

男性の言葉に、一瞬だが妙な感覚に襲われた。振り返り、遠ざかつて行く背中を見ていた。人の波は、立ち尽くす翔を避けるように流れている。男性の姿が視界から消え、山手線へ向かつて歩き出した。

山手線の外回り、渋谷・池袋方面に乗り込んだ。車内はそれほど混雑していない。

「とりあえず池袋で乗り換えるか……」

路線の案内図を見上げている。扉を開ける大きな音が聞こえ振り向くと、隣の車両から大工らしき服装をした大柄のおっさんが入ってきた。

「うつひやつひや。ういー……」

ベロベロに酔っ払っている。周りの乗客は見て見ぬふりをしていた。何かやらかすんじゃないのかと期待の目線を送っている翔の居

場所に差し掛かると、目が合つた。しかし、おっさんは電車の流れに流されるまま、フラフラと次の車両へ行ってしまった。

「ちつ……つまんねーの」

何事も無かつた事が気に入らなかつたのか、不貞腐れたまま席に座つた。

電車は田黒駅に到着している。翔は中刷り広告などを見て発車するのを待つていた。ベルが鳴り止み閉まるドアと同時に「ギャル」人が飛び込んできた。

「ちょっとお！… 今のマジ際どくない？」

「もう超一うける！… 挟まるかと思つたじゃん」
ギリギリの動きに興奮したのか勝手に盛り上がつていて。そのテンションの高さは異常だ。静寂に包まれている車内で迷惑そうな表情を浮かべている乗客。

「……（ちつ、挟まれればおもろかつたのに）」

そんな目線でじつと見ている翔に気づいたのか、一人は目の前の席に座つた。ミニスカートを気にする様子もなく、足を開き座つている。当然、下着が丸見えだ。

「……（じつと見のも変だし、見て見ぬふりも嫌やな）」
目が泳いでいる。一人はチラチラと翔を意識して笑い、ヒソヒソと話し始めた。

「……（うわつ、最悪！…）」

居ても立つてもいられず、隣の車両へと向かつた。

第3話 噂～修羅～（前書き）

この作品はフィクションであり、実在する人物名、地名、団体等など一切関係ありませんので、了承ください。

第3話 噂～修羅～

練馬区・某所

翔は地元に到着した。街灯が光り輝き、想いでと共に懐かしい景色を眺めていた。

「さすがに10年も離れると、景色が結構……変わつてねえ……」

街の変化を覚悟していたのか、ホッとした表情を浮かべていた。感慨にふけりながら地元を見歩いている。

すると、母校の制服を着た不良達が屯していたので立ち止まつた。彼等を見つめ中学時代の懐かしい想いでに浸つていて。しばらく眺めていると、煙草を吸い始めたり、飲んだ空き缶を道路に投げ捨てたり、通行人に絡んだりとやりたい放題に振舞い始めた。

「かあ……いつの時代もやる事は一緒だなあ」

呆れた顔で見ていると、通りすがりのお爺さんに不良達が絡み始めた。調子に乗った一人が杖を蹴飛ばし、倒れ込む姿を見て大はしゃぎしている。

「ちつ、あのガキ共……」

不良達に向かって歩き出した。杖を拾いお爺さんを抱き起しす。不良達はただ傍観していた。

「お爺ちゃん大丈夫？」

「これは、どうもすいませんねえ……」

お爺さんは杖を突き、ゆっくりと歩き出した。翔は不良達に背を向けたまま、その姿を見届けた。

「おじ見ろよ、正義のヒーローが現れたぞ……きやー、助けてヒー
ロー……」

背後から小馬鹿にした野次や空き缶を投げつけている。よほど『
入らなかつたのか挑発を繰り返し、大騒ぎしている。

「あれ！！ もしかして翔かしら？」
通りすがりの女性は騒ぎに『
つき集団を見ると、翔らしき姿を見
つけ近づいて行つた。

「見つけました……」

物陰から覗いている怪しい男も、騒ぎの渦中に翔の姿を発見し、
何処かへ報告をしている。

終わる事の無い挑発を繰り返し大騒ぎしている不良達は、振り返
つた翔を見て言葉を失つた。

「正義のヒーローの方がまだましだつたかもな……」

殺氣を放ち悪魔の形相で睨んでいる。不良達は蜘蛛の子を散らす
ように逃げ去つて行つた。

「……つたく。俺もあんただつたのかなあ」

「良く言つわよ。あんたに比べれば可愛いもんよ」
横から聞こえる女性の声に、驚いた表情で隣を見た。

「……弘美か？」

「生きてたんだねー。よかつた……」

喜びのあまり人目も気にせず抱きついてきた。

「お、おい。離れろ……（皆が見てる、恥ずかしいだろ）」

大騒ぎしていたからか、翔の周りには軽い人だかりができていた。

「はい、商店街の入口付近です。……このまま尾行します
再び怪しい男は現状報告を何処かへしている。

「あのねえ～。みんな心配してたんだよ……」

「はいはい。それより、昌也の店を教えて（いい加減離れろよ）」

「もうひ……えーとね、まー君のお店は……」

翔から離れ、昌也の店の場所を教えている。

「ありがと、じゃーな

「サバサバとお礼を言つて立ち去るひつとしている。

「ちょっと、まだ話が……」

「悪いい、急いでんだ……また今度な

手を振りながら逃げるよう立ち去つて行った。

翔は教えられた昌也の店へ向かわず、人通りの無い裏道へ進んだ。人気の無い小さい広場に辿りつき、辺りを見回している。

「ふう、ここなら大丈夫だろ……誰だ？」

「……気づいていたんですね。流石です」

しばらくして薄暗い場所から怪しい男が姿を現した。明らかに暴力団関係者と思われる。

「ああ、お前か。……『重慶』は元気にしてるのか？」

「はい、とてもお元気ですよ」

男は微笑みながら答えるが、口は笑つても目が笑つていない。

「……で、用件は？」

「証明して頂きたいんですね、彼らで……」

背後から見るからに手強そうな6人の猛者が姿を現した。翔は振り返り、予想外だったのか苦笑いしている。

「証明ねえ……（うげつ、全く気づかなかつた……）」

「ご存知だとは思いますが、中継されておりますので……」

「いい加減その趣味やめたら……『重慶』聞こえてんだろう？」

「……では」

その声と同時に、襲い掛かってくる猛者達。瞬時に翔を取り囲み一斉攻撃を繰り出してきた。

「むつ……つあ……ぐつ……ぐわあ」

予想以上の強さに完全に後手後手になつていて。背後からの強烈な蹴りに、包囲網の外へふつ飛ばされた。倒れている翔を見下ろしながら不敵に笑う猛者達。

「痛つ、こんにゃろ「！」

「大丈夫ですか、そのままだと危険ですよ……」

その光景を穏やかに眺めている男は、含みのある言葉を投げかけた。翔は立ち上がりその男を見た。

「しようがねえなあ、希望を叶えてやるよ。（【潜在・修羅】）うおお……（我に眠りし修羅よ、今……田覓めよ）」

「修羅」殺戮の魔羅。魔界の頂点に君臨する絶対的支配神。万物を滅亡へと導く。

悪魔の形相に黒いオーラが全身を覆つていて。解き放たれる殺氣に、猛者達は圧倒され後ずさりしている。

「……いくぞ」

2分後。

無残な姿をした猛者達が地面上に転がつていた。

「で、目的は？……って、もう居ねーし

男に問いかけるが、いつの間にか姿を消していた。

「ふう……あーあ、返り血を浴びすぎたぜ」

服に付いた大量の血を見ている。ふと腕時計を見ると11時を回っていた。急いで昌也の店へと向かつた。

第4話 噂～騒りの翔～（前書き）

この作品はフィクションであり、実在する人物名、地名、団体等など一切関係ありませんのでご了承ください。

第4話 噂～騙りの翔～

練馬区・Bar Chance

翔は店の前に到着し、勢いよくドアを開けた。

……ガラン、鈴の音が強く鳴り響いた。

「あー疲れた……昌也はいるかー？」

大声で叫ぶ姿に、店内の視線が一斉に注がれた。常連客と従業員は唖然としている。血だらけ男が来店してきたのだから当たり前だ。そんな事は御構い無しに店内を見渡すと、カウンター越しに男に詰め寄らされている昌也を発見した。

「……（昌也だと？）」

男は名前に反応したのか、静かに席に座り煙草に火を点けた。

「おおっ、こっちだこっち……（なんでコイツは血だらけなんだ？）

カウンター内から声を掛ける昌也はあからさまに嫌な顔をしている。径子は無言のまま翔を見ていた。

「あんにやろー……帰つて早々に襲つてきやがつて、何なんだ……」「昌也に歩み寄りながら、ぶつくせと独り言を言つてくる。

「えつ、もしかして……【侠狼会】？」

「んつ？ 何で解つたんだ……」

「こちらさんが詳しく教えてくれるかもよ

めつくり大人しくなつた男に目を向けた。翔は何の事やら分からないまま、カウンターに座つている男に声を掛け顔を覗き込んだ。

「……誰だあ？」

「あー！ お前こそ誰だ？」

「何だと……。客らしいが、いいのか？」

いきなりの喧嘩腰に驚いている。そして、言い方が気に入らなかつたのか苛々しながら冒也に尋ねた。

「【修羅】には絶対になるなよ……！」

「……（【修羅】……）」

店の破壊を恐れた冒也は、目をギラつかせ念を押した。その言葉に反応したのか、男は驚愕した顔で目を見開いている。翔は再び覗き込んで睨みつけた瞬間だつた。

「ちょ、ちょっと待つてくれ。もしかして本物……ですか？」

「本物だと……？」

眉をひそめ首を傾げている。

「あつはつはつはつはつ」

冒也は腹を抱えて大笑いしている。

「なあ～に笑つてんだよ？」

「すまんすまん、実際に出来るのは俺も初めてでよ……。お前が消息を絶つてから偽者があちらこちらで出没してるって……」

「偽者！？ 消息を絶つ！？」

「ああ、お前が旅に出た事は誰にも言つてないからな。4年ぐらいしてからだつたかな、死亡説が流れたのは……」

径子は無言のままそつと冒也を見つめた。

「（どおりで……）おいおい、勝手に人を殺すなよ……」

苦笑いをしてくる。男は無言のまま一人のやり取りを聞いていた。

「お前、『仁』には話したのか？」

「お前だけに決まつてんだろ（何であいつに言わなきゃならんのだ）

「それじゃ～偽者の出現もしょつかないな」

「……そなんですよ、冒也の兄貴……」

「兄貴だあとお～」

だんまりしていた男は意を決して話題に割り込んだ。

「大変申し訳御座いませんでした。私は三原台の修と言います」
申し訳なさそうに深々と頭を下げた。

「ほお～君が……で、修君は何で翔を騙つたのかな？」

「はい、あの……【皆殺】の伝説に憧れておりまして……。翔さんの死亡説を聞いてから、少しでも近づきたいと……」

真剣な眼差しで翔を見ている。昌也もまた、無言のまま翔を見ていた。

「……その話はどうでもいいが、今すぐ三原台に帰った方がいいぞ。お前が手を出したのは【侠狼会】が囮つているチンピラ達なんだよ」「あっ、はい。こんな形だったとはいえ、お一人に出来て嬉しかったです！－」

修は報酬として受け取った包みを残したまま、女を連れて店を飛び出して行った。

「お前を襲つてきたのは『重慶』の手の者だったのか？」

「う～ん……だが、三原台にまおそらく本隊が動いただろ？」「

「三原台ねえ～」

昔を想い出していた。

「おー！……それより傍に居るその可愛い店員は誰なんだ？」
径子は可愛いと言われ驚いた表情をしている。

「おお、紹介が遅れたな。俺の彼女だ」

「なつ、何いーー！」

驚きのあまり目を見開いた。

「あの、初めてまして径子です」

おしとやかに微笑みながら挨拶をした。

「よ、よろしく……（羨ましい）」

引き攣った表情で答えた。

「お前さあ、それより風呂貸してやるから入つてこいよ
「……お、おお。やすがにこれじやーお客様ないもんな
家の鍵を受け取り店を後にした。

翔と修が居なくなつた店内。常連客の慣れたいつもの空気が流れ
ているが、どこかソワソワした雰囲気が漂つていた。時刻も口をま
たぎ、店内は少数の常連客が残つているだけだった。

昌也と径子はカウンター内で後片付けと明日の下準備を始めていた。

「まー君。翔さんつて聞いてた噂と全然違うね」
「うーん、半分以上は当たつてる気が……」
手を動かしながら苦笑いしている。
「でも、いい人そうだつたよ」
「いい奴だよ。弱い立場の人には絶対に手を出さないし」
「え？ それって当たり前じゃ……」
呆れた顔で昌也を見た。
「あいつは当たり前つて常識が無いんだよなあ」
「……噂の部分も本当にあるつて事？」
昌也は頷きながら考えていた。
「上手く言えないんだけどさ、両足が不自由なんだろつな。杖を突
かずには、なんとかその足で歩いている障害者の人つて見た事ある？」
「うーん、両足を引きずるように歩いている人の事かな？」
「そうねー、俺達の中学にその障害を持った女の子がいてな……」

翔と昌也が、中学1年生の時である。

15年前。

昌也、裏庭にあるこつものたまり場に翔の姿が見えない。昌也

は教室に向かい話を聞くと、今日は欠席しているとの事だった。しようがなくたまり場へ戻ろうと廊下を歩いていると、翔の姿を発見し駆け寄った。

「お前……また喧嘩したのか？」

「喧嘩じゃねえ、袋叩きにされた……体中が痛え」

翔は顔に数箇所の青あざと鼻血を出していた。

「どうせあの公園に行つたんだろ……先輩達にも近寄るなって言われただろ？」

「つるせえなあ……頭に響く」

当時、翔達の地域にある小さな公園は隣町の中学校に占領されていた。そこの中学生はほとんどが不良であり、3割近い卒業生が組員の道を選ぶ最悪の学校だった。

「で、理由はなんだつたんだ？」

「お前には関係ねえよ」

つれない返事をして、翔は立ち去つて行つた。

数日後、心配した昌也はこいつそりと翔を尾行した。やはりあの公園へ向かっている。公園付近に到着し、ふと目を離した隙に見失ってしまった。

「やばつ、あいつどこ行つたんだ？」

物陰からひつそりと公園を覗いてみると案の定、公園に面した道路に隣町の不良達が屯していた。

「6人か……今日は少ない方だな」

不良達を見ている視界の奥に障害者の女の子が姿を現し、一ちらに向かって歩いている。

「まざいな、このままじや奴等の所を通るぞ」

不自由な両足で一生懸命に歩いている女の子は、不良達の前を通

り過ぎた。

「ふう……絡まれなくて良かつたぜ」

何事も無かつた事に安堵の表情を浮かべている。手には沢山の汗が握られていた。

その時だった、不良の一人が女の子の真似をして他の連中を笑わせ始めた。女の子は気にする様子も無く一生懸命に前へ前へと歩き続けている。不良達の終わらない馬鹿騒ぎと笑い声に、昌也は段々と苛立つてきいていた。

女の子が昌也の隠れている場所に差し掛かった時だった、遠くでよく見えなかつたが襟元まで涙で濡れていた。声を押し殺し立ち止まる事無く歩き続け、悔し涙を流している。

昌也は物陰から飛び出して連中に向かつて走り出した。

「調子に乗つてんじゃねーぞ！…」

翔の叫び声が聞こえ、どこから現れたのか不良達の輪の中で暴れている。昌也が到着すると真似をしていた一人が倒れていた。翔は躊躇する事無く男の両足を圧し折る。悲痛の叫び声が、周囲の人目の前にちらりに向かって走り出た。

「おい、どうした、面白いんだろ？ 笑えよ……笑えつ……」

圧し折った足を更に踏みつけて大喝している。凄まじい迫力に圧倒され、他の連中は戦意を失い苛めていた。

「おい、もうよせ。こいつらもこれで懲りるだろ」

優しく声を掛け帰ろうとした瞬間だった。次々と他の連中の両足を圧し折つていく。

「……翔！！」

叫びも空しく、道路には蠢きながらのた打ち回つている連中がいた。

「……怖い」

青ざめた表情で昌也を見ていた。

「まあ、真似していく奴だけなら分かるが……全員はやりすぎだな
何故か笑っていた。

第5話 連続殺人事件～痴漢～（前書き）

この作品はフィクションであり、実在する人物名、地名、団体等など一切関係ありませんのでご了承ください。

第5話 連続殺人事件 ～痴漢～

港区・東京タワー

東京を代表する名所として大勢の人々に愛され続けている東京タワー。洋子はエレベーター・ガールとしての誇りを胸に、日々働いていた。目当てのリピーターを持つ程、絶大な人気ぶりであった。

そんなある日の事、いつもの様に乗客の案内を終え、エレベーターに乗り込んだ。大勢の乗客で混雑したエレベーター内、第一展望台へと向かっている。間もなくして、背後から覆い隠すように迫つてくる大きな影に気がついた。

「……（触られている？）」

腰からお尻の辺りに手の感触がする。混雑による気のせいかと思ったかたが、徐々にその手はエスカレートしていく。異変を感じ抵抗を試みるが、隅に追いやられていて動けない。男に覆い隠された洋子の姿は、大勢の乗客からは見えなかつた。

「はあ……はあ……」

耳元で荒い息遣いが聞こえる。気持ちの悪さに、洋子は下を向いた。無抵抗を確信したのか、男の手は内へ内へと進む。

「……んつ（ちよつ……と……）」

遮ろうと抵抗を始めた手など気にもせず、動き回る男の手。押し殺した洋子の声は、乗客達の賑やかな声にかき消された。

「お待たせ致……しました。第一展……望台へ到着……致しました」執拗に攻め続ける指先に耐えながら、力の無い声を振り絞つた。両足が小刻みに震えている。大勢の乗客に紛れ、何事も無かつたかの様に痴漢は姿を消した。

数日後。

終電が姿を消した頃、薄暗く人通りの無い道を男は歩いていた。タクシー乗り場にでも向かっているのだろう。ほろ酔い気分で歩いている男の前に、洋子の姿が見える。

「こんばんは。先日はどうも……」

「……（誰だ？）」

私服姿に気づかない様子だったが、思い出したのか目を見開き視線を逸らした。酔いも一瞬にして醒めた様子だ。

「女性の気持ちなんて解りませんよね？」

「……何の事かな？」

証拠がない事を盾にしらばくれている。しかし、疚しい気持ちからか洋子の目を見ることが出来ない。

「一緒に警察に行きましょう」

「な、何をさつきから自分勝手な事を……。人違いだよ人違い。それに、証拠もあるのか？見せてみろよ……」

逆ギレをして、その場から言い逃れようと必死になつていて。そんな卑怯な男の姿を見ていた洋子の目の色が変わった。

「自ら裁きを下すしかないようですね……」

「な、何をするつてんだ……！」

洋子はゆっくりと宙へ舞い上がっていく。男は目を疑い、洋子の姿を目で追つていた。その瞬間だった、首が胴から離れ地面に転がつた。

第6話 連続殺人事件～共通点～（前書き）

この作品はフィクションであり、実在する人物名、地名、団体等など一切関係ありませんのでご了承ください。

第6話 連続殺人事件～共通点～

足立区・警察署

国民の安全を守る。そんな正義に憧れて、司は警察官の道を選んだ。身近な人達に始まり、強いては国を守る。使命感にも似たその感情が彼を奮い立たせた。命がけで悪事を働く者達と向き合う日々。異例の速さで署長の座に昇進した彼も、今年で43歳を迎えていた。

司は、一人署長室で資料と睨み合っている。犯人の所在を突き止める任務を任されていたからだ。

「うーん……（『学』の所在をどうやって突き止めるのか……）」
ブツブツと言いながら考え込んでいると、ノックする音が聞こえた。

「失礼します。署長、ついに管轄内での被害者が出ました……」
新たな事件の報告が舞い込んできた。今月に入り、区内各所で発生している連続殺人事件の報告だ。司は関連資料を受取った。

「これで4件目の発生となります」

「犯行の手口は全て一緒……」

「はい、正面から刃物で真つ二つです」

「コーヒー片手に、しばらく考え込んでいた。

「……おそらく『一鉄』が引き起こした【大暴走】以来の大事件ですよ」

興奮気味の部下を他所に、司は冷静に考えていた。

「他の3件に携わった関係者からの情報は？」
「奇怪な事だらけで、どの現場も犯人の目星すらつけておりません。しかし、被害者の共通点はある程度確認されています」

「共通点?」

「はい、男性と東京タワー」

「……東京タワーだと?」

腕組みをして眉をひそめた。

「はい、被害に遭う数日前に全員が東京タワーに立ち寄っています」

「防犯カメラに映っていた……か」

再び資料に目を通し考え込んでいる。

「現場には血痕が全く見当たりませんし、奇妙すぎます。巷では、呪いだの祟りだと無茶苦茶な状態です」

「わかった、ご苦労様。捜査を続けてくれ……（今回も相談するしかないか）」

部下の退室を見届け、司は携帯を手に取った。

第7話 連続殺人事件～ニュース～（前書き）

この作品はフィクションであり、実在する人物名、地名、団体等など一切関係ありませんのでご了承ください。

第7話 連続殺人事件～ニュース～

練馬区・Bar Change

昼下がり、偶然にも翔はBar Changeの前を通りかかっていた。シャッターが開いているので勝手に中へ入ると、準備に追われている畠也と径子を見つけた。

「あれ、何で店にいんの？ デートじゃなかつたのか？」

「お前、ニュース見てないの……」

忙しい手を止め、呆れた顔で見ている。

「……俺がそんなもの見ねー事ぐらい知つてんだろ」口を尖らせ息巻いている。

「連續殺人事件の被害者が全員立ち寄つてるんだとよ」「……で？」

「径子が怖いからやめようつて」

「まー君、ごめんね……」

「気にするな。嫌なのに行つても楽しくないしな」シュンとした表情の径子を畠也は慰めていた。

「ふうん」

よく理解出来ていない様子である。

江戸川区・某所

12歳にして学者顔負けの知識と知恵、千里眼を潛ませる少年・涼。戦略的な書物を読み漁り、戦術や罠の実践改良などもこなす、ちょっと危ない小学生。しかし、まだ甘いものが好きだった。

昏睡がり、リビングの食卓でチキンプレートを食べている。母親はソファーに座りテレビを見ていた。ついてくる番組はもうひとつワイドショーだ。

「」コースをお伝えします。昨夜未明、連續殺人事件の被害者と思われる……」

「物騒な世の中ねえ」

「警視庁の発表によりますと、犯行の手口などから同一人物との……」

「……（やうそろかな）」

「東京タワーで、何らかのトラブルが原因と……」

「残念だったねー、せっかくの遠足だったのに……」

「しょうがなによ、それに僕だけじゃないしね」

……ジリリリリリ……ジリリリリリ。

電話が鳴っている。思い腰を上げ、母親は電話に出た。

「はい……あら、どーもいつもお世話になつておつます。お待ち下
さい……」

涼を見て手招きしている。

「ここにちは。……はい、わかりました」

電話を切るや否や、リュックサックを取り出し準備を始めた。

「もしかして、今回の事件?」

「うん、そうみたい」

「気をつけるんだよ」

「はい」

母の抱擁を受け涼は出発した。

第8話 連続殺人事件～推理～（前書き）

この作品はフィクションであり、実在する人物名、地名、団体等など一切関係ありませんのでご了承ください。

第8話 連続殺人事件～推理～

足立区・警察署

警察署に入るや否や、涼は署長室へと案内された。ここを訪問するのもう何回目になるだろうか。ほぼ顔パス状態である。

「おっ、涼君わざわざすまないね」

司は首を長くして待っていたのか、涼の顔を見るなり喜んでいる。涼は簡単に挨拶を済ませ、案内されたソファーに腰掛けた。

「すでに知っているとは思うけど、これを見てくれ……」

涼は手渡された資料に目を通して。その姿を見ている司は、毎度思うところがある。目では資料を見ているが、実際のところその奥に潜む遠くを見ている感じがしていた。

「（【潜在・アテーナー】）……不思議な事件ですね
～アテーナー～ギリシア神話に登場する戦争の知略を司る都市の守護神。知恵・工芸・学芸の神でもある。

「そりなんだよ。正直お手上げだ……」

司は飲み物の手配をして、頭を抱えている。

「……人の仕業ではないかもしませんよ。不思議な力を持つている者達がいることは……」

「ああ、理解しているつもりだ」

「その線で事件を紐解くと辻褄が合ってきます」

「んつ、もう犯人を確信している言い方だね」

何とも言えない表情で答えた。

「はい、ある程度までは……」

「聞かせてもらえるかな？」

涼は差し出された飲み物を頂き、一息ついてから話し始めた。

「まず、正面からの切断なのに全員が無防備という点です。普通、正面から刃物が迫つてきたら反射的に先に手が出るはずだと思います。」

「……物凄い速さで突進してきたとを考えたら？」

「どんなに速くても人の速度なら顎を引くなり身を縮込ませる方が速いと思います。なのに全員の首が無防備な状態になつていた……」司は話を聞きながら、顎を引く素振などをして被害者状況の確認をしている。

「……上を向いていた？」

「はい、おそらく何かを見上げていたんだと思います」

「ううん。しかし、犯人が上に何かを投げて見上げた瞬間にって事も……」

「はい、それは否定できませんが、問題は血です」

「血痕どころか血の一滴も現場には無かつた……」

司に限らず、事件を担当した同僚達が一番頭を抱えた部分であつた。

「血を一滴も流させずに相手を斬る……」

「……【妖怪：鎌鼬】？……つてまさか」

「はい、私はそうだと思います」

「……」

「それを操つている人が……」

「んー、確かに辻褄は合つが……動機は？」

司は話を遮り、納得のいかない表情を浮かべている。

「本人に聞くしかないですね。この人達から事情聴取して下さい」

「……エレベーターガール？」

涼の指差す資料の場所を見て、司の脳は錯乱した。その時、ドアをノックする音が聞こえた。

「失礼します。署長、お電話が……」

警視庁のお偉いさんからとの事で、一人は話を止め涼は帰宅した。

その夜。

司は呼び出された銀座高級クラブ・リジュームにいた。お偉いさんはホステス達が囲い、隣には絶世の美女と言われているクラブのN.O.1が接待している。

「今回の事件だが、君に一任されたと聞いているが……」

「はい。管轄内で被害者が出ましたので……」

「あの大事件の主犯を捕らえた君だ。大いに期待しているぞ……！」

「……ありがとうございます」

「どうぞ……」

N.O.1から差し出されたお酒を受け取り、一気に飲み干した。

数日後。

任意の事情聴取が行われ、数名のエレベーターガールが警察署を訪れていた。部下に案内された一同は応接室に通され、椅子に腰掛けた。

「皆さん、大変お忙しい所、ご協力頂きありがとうございます。今月に入つてから何か身の回りで変わったことなどはありましたか？」

司の質問に多少ぞわつきながら答える一同。

「私は特に……何もなかつたと思います」

「はい、私も」

「あの……痴漢に遭いました」

勇気を振り絞り一人が答えた。

「失礼ですが、犯人の顔などは……」

「仕事柄、振り向く事がありませんので……」

「そうですか……」

「あの、痴漢つて立派な犯罪ですよね？」

突然、横から食つて掛かるような口調で質問された。

「はい、もちろんです」

「もう少し警察の方々もそつちを厳しく……」

不満気な表情をしている。

「そうだよね。いい迷惑だわ」

同調する彼女達。警察に対する不満が部屋に充満していた。同は取締る立場から申し訳ない表情を浮かべていた。

「それでは皆さん、貴重なお時間を頂き、ありがとうございました」と司はお礼を述べ、急ぎ足でモニタールームへと移動した。モニタールームでは涼が一部始終を視聴していた。

「涼君、どうだつた？」

「判りました……4人目の女性です」

「理由は？」

「本人が教えてくれますよ……」

涼は何か考えがありそうな表情を浮かべていた。

第9話 連続殺人事件～実証～（前書き）

この作品はフィクションであり、実在する人物名、地名、団体等など一切関係ありませんのでご了承ください。

第9話 連続殺人事件 ～実証～

江戸川区・某所

夕暮れ時、帰宅途中の涼は人通りのない道を歩いていた。しばらく歩いていると、背後から近づいて来る足音に振り向いた。

「ボーヤ……凄いじゃない、まだ小学生なんですって……。帰りに渡された紙を見て驚いたわよ」

足音の正体は洋子だった。不敵な笑みを浮かべている。

「「めんなさい……殺さないで下さい」

全身を震わせ、命乞いをしている。

「「めんね……怨まないでよ（【操術：鎌鼬】）」

「鎌鼬」鎌のような両手の爪を持つ妖怪。三位一体の姿で現れ、一匹目が人を倒し、二匹目が刃物で切り、三匹目が薬をつけていくため出血・痛みがない。

洋子はゆっくりと宙へ舞い上がっていく。それを見た涼は瞬時にしゃがみ込んだ。頭上を凄まじい風が通り抜けていくのを感じた。

「！」

洋子は目を見開き驚いた表情を浮かべている。

「やはり操っていたでしょ？」

誰かに話しかけている。すると物陰に隠れていた司が姿を現した。

「ふう、心臓が止まるかと思つたぞ。自ら困になるなんて言つから

……

何事も無かつたことに安堵の表情を浮かべている。

「……嵌めたわね！！」

洋子は怒り心頭の表情で見下ろしている一人を睨んだ。

「奇怪すぎて、実証するしかなかつたんですよ

「ぱつちつ撮れてるぜ……おとなしく血首するか？」
司は手に持つてゐるピukeオカメラを見せた。

「あんまり図に乗らないでよね……」

突如、妖怪・鎌鼬が洋子を囮むようにして姿を現わした。
「げつ、3体もいるぞ！…」

「違いますよ、三位一体なんです」

「……」

「屍が一つ増えるだけ……何も変わらないわー！」
叫び声と同時に上空から鎌鼬が襲い掛かってくる。

「涼君、ちょっと離れていなさい」

涼を遠ざけ、立ち向かう司に鎌鼬が襲い掛かる。

「うわっ……おっ……」

三位一体の鋭い斬撃をかわしきじて避けている。

「ふふ、死になさい……」

空中から見下ろしながら笑つてゐる。

「こつまでもやられっぱなし大だと思つなよ……」

右手を拳銃のようにして構え、狙いを定めた。

「（【体技・空砲】）喰らえ！…」

浮遊している洋子に空氣の銃弾が向かって行く。だが、撃ち込んだ銃弾のほとんどを鎌鼬に弾かれた。

「……（他にも誰かいるーー？）」

涼は何かの気配を感じ、辺りを見回している。

「……あつらあ～」

司はほとんどの銃弾を弾かれ参つた表情を浮かべてゐる。

「あんたも変な力を持つてゐるようね？」

「俺達だけじゃないと思うがな……」

睨み合いながら対峙している一人。

「司さん、他にも誰かいます！…」

叫び声と共に気配が消えた。

「えつ！？ 何だつて？」

涼を振り返つた。一瞬の隙を突き、洋子は飛び去つてしまつてゐる。

「あつ！… 逃がすか…」

口では言つて見たものの、為す術もなくあつせつと取り逃がしてしまつた。

「取り逃がしちゃいましたね…」

涼は苦笑いしている。

「……面白ない（だつて俺は飛べないもの）」

口を開けたまま肩を落としていた。

「……（あの気配は一体何だつたんだろう…）」

翌日、司は事件の決定的証拠として犯行手口を撮影した映像を提出したが、世間的・科学的に理解されず、洋子の指名手配は証拠不十分で終わつた。

第10話 謎～音郷道場～（前書き）

この作品はフィクションであり、実在する人物名、地名、団体等など一切関係ありませんので、了承ください。

第10話 謎の音郷道場

文京区・音郷道場

全國にその名を轟かす空手の名門・音郷道場。

門下生の熱く激しい稽古が続いている。学校から帰宅した香織は、さつそく道着に着替えて姿を現した。2代目師範の娘としてだけではなく、門下生の憧れの的だつた。準備運動をしている香織に初代師範が近づいてくる。

「きやーー！ もうっ、お爺ちゃんつたら……胸を触らないでよねーー！」

「ひえっひえっひえっ。脇がまだまだ甘いんじやよ……お尻は気づかんかったのか？」

両胸を包み込むように押さえている香織に、爺は一タついた顔で逃げるよつに奥の部屋へと消えて行つた。毎度の事ながら、そんな刺激的な光景を目の当たりにした門下生は、稽古に集中できずにざわついている。

「やはり老師は只者じやないぞーー！」

「そりやそつだろ。なんてつたつて……」

「大抵の奴なら、胸に届く前に指か手首を折られているはず……」

「ああ、いくら香織ぢやんが油断しているとはいえ……つて、そちかよーー！」

「こりひーーー 無駄口を叩いてないで、稽古に集中しろーーー！」

2代目師範は門下生に活を入れた。再び稽古に熱が入る。その姿に満足している師範は、ふくれつ面の香織の元へ歩み寄つた。

「まつたくもおーお爺ちゃんつたら、皆の前で……」

「香織、『誠』君は休みか？」

「うん、テスト期間中なんだって……」

「そうか、大学生も大変だな……」

「あっ、そうだお父さん。この前『涼』君がね……」

「（小さな声で）『涼』君では師範と呼びなさい」

「はい」

「ん？ 香織のテストはいつからだ？」

「高校生は来月からよ」

「そうかあ……来月……うーん」

師範は指導そつちの氣で、何やら一人でブツブツ言いながら考え込んでいる。

「こらっ！ 娘に構ってないで、指導に集中しろ……」

香織は師範に活を入れた。

第11話 謎の未確認生物（前書き）

この作品はフィクションであり、実在する人物名、地名、団体等など一切関係ありませんのでご了承ください。

第11話 謎の未確認生物

文京区・東京大学

夏休みに入り、香織は誠の運転で一泊二日の旅行先へと向かつていた。晴れ晴れとした空の下、レンタカーは東京大学付近の大通りを走行している。

「教授、あの未確認生物はこの辺に逃げて来たと思うんですが?」「ふむ、まだ遠くへは行つていないはずだ。手分けして探そう。……なにやら生物学部の教授と生徒達が校舎周辺を捜索している。「あいつらいつも追いかけてくるな。麻酔銃なんてアブねーもん持つてるし、ここは逃げるしかない。……」

その未確認生物は逃走中であつた。物陰に身を潜ませ、大通りを渡るタイミングを計つていた。

「いたぞ!! こっちだ!!」

生徒の叫び声が近くで聞こえた。慌てた未確認生物は大通りへ飛び出して行つた。

その頃、香織と誠は宿泊先のイベント話で盛り上がつていた。

「他県からわざわざ見に来る程、花火が有名らしくてさ。……」

誠はチラチラ香織を見ながら運転している。笑顔で話を聞きながら前を見た香織は、何かが横断しているのが目に入った。

「ちょ、ちょっとまこっちゃん!! 前見て前!!」

誠が前方を見ると、そこには獸か人か見分けがつかない何かがいた。とつさにブレークを踏んだ。周囲にブレーク音が鳴り響く。跳ねた感覚は無かつた。どうやらその何かは躊躇かれて逃げていったようだ。安堵の表情を浮かべている一人。

「何だつたの? 熊っぽく見えただけど……」

「危なかつた、轢かなくて良かつた」

「もう、ちゃんと前見て運転してよねーー！」

「ごめん。これからは気をつけるよ」

気を取り直し、一人は旅行先へと車を走らせた。

現場を目撃していた生徒達は啞然としていた。数名は腰を抜かし
責めている。

「……教授、あの生き物……もの凄い動きをしましたね」

「まさに珍獣だ……捕獲したら生物学界を揺るがす発見になるかも
しれない……！」

教授の田の輝きとは裏腹に、生徒達は未確認生物への恐怖に襲わ
れていた。

第12話 謎～吾駒運送～（前書き）

この作品はフィクションであり、実在する人物名、地名、団体等など一切関係ありませんので、了承ください。

第1-2話 謎～吾駒運送～

石橋山古戦場

頼朝挙兵の地として知られている石橋山古戦場。高速を降りた車は海岸沿いを走行していた。晴れ渡る空、目の前には広大な海が広がっている。

「わあ～……綺麗な海」

「まだ1時間近くかかるな。ちょっと休憩する?」

「そうだね。海を見たいわ」

車を近くの路肩に停め、一人は心地よい潮風に吹かれ景色を眺めていた。打ちつける波の音が心を癒していく。

「……今回の旅行だけ。師範は怒つてなかつた?」

「つうん、むしろ喜んでたよ。お爺ちゃんは寂しそうだつたけど……」

誠はその言葉に若干の笑みを浮かべてるが、少なからず抵抗を感じていた。いくら親公認の恋人同士とはいえ、香織はまだ高校生である。

「私はね……まこっちゃんとこうしていられるだけで幸せ」

誠を見つめ、恥ずかしそうに照れた表情を浮かべている。誠は微笑みながら優しく抱き寄せた。一人の顔がゆっくりと近づいていく。

「お母さん～ん！　お父さん～ん！」

遮るように、少女の叫び声が遠くから聞こえた。一人は声のする方へ駆け出し山間の道を曲がると、そこには地元の人達と思われる人ばかりが出来ていた。

「まこっちゃん、上見て～！」

香織が指差した崖の上から事故車両が顔を出している。今にも落下しそうだ。姿こそ見えないが、その車両から少女の叫び声が聞こ

える。

「すいません。崖の上に行く道はどこにありますか？」

見渡す限りそれと思われる道がなく、誠は地元の人に尋ねた。

「あそこに行くには、ずっと先の道を迂回するしかねえよ

「それじゃ一間に合わない……」

誠は登れそうな場所を見つけて、急いで崖を登り始めた。

「あーどうしよう。何もしてあげられない……」

香織は落ち着かない様子で事故車両を見上げている。その間にも、

ジリジリと車両は傾き始めていた。

誠はなんとか崖の上に到達し事故車両へ走り出した。しかし、まだ距離は100m以上だ。全力で走る誠の視界に、対向車線から1台のトラックが現場近くで停車するのが見えた。

「まいっちゃん、急いで……」

崖を登りきつた姿を見届けた香織は、大声で叫んだ。事故車両は限界を超えて、ゆっくりと落下し始める。

「くつ……（間に合わない……）」

走る誠の耳に、崖下から大勢の悲鳴が聞こえた。

「きやあ……えつ？」

崖下にいる香織達からは、落下した事故車両が宙に浮いている様に見えていた。ざわつき騒ぎ始める人だから。

現場に到着した誠は目を疑つた。トラックの運転手が、右腕一本で車両のテール部分を掴んでいる。そして、ゆっくりと引き上げ始めた。誠はその姿を見て、無言のまま立ち尽くしている。引き上げた車のドアを開け、少女を抱きかかえた。

「もう大丈夫だ。怖かつたな……」

「……お父さん、お母さんは？」

全身を震わせている少女は声を振り絞つた。落ち着かせた少女を誠に預け、車両に向かつて歩き出した。中を覗き込み両親の様子を窺つている。再び誠の前へと歩み寄った。

「気を失っているが、大丈夫だよ

「ありがとう……」

精一杯の声でお礼を言つた少女は、誠の腕に抱かれたまま大声で泣き出した。

「後は頼んだぞ、青年……」

誠に後事を託し、トラックへと歩き出した。

「すいません……あの、お名前は？」

誠の問いに振り向きもせずに無言のままトラックへ乗り込んでしまつた。走り去るトラックに書かれている会社名を見ていた。

「……（吾駒運送？）」

「まひつちゃん、大丈夫？」

香織が崖下から呼んでいる。報告がてら顔を出しに行こうとした時だった。目の前に両親が現れ、誠は抱きかかえていた少女をおろした。意識が回復したようだ。特に一人には外傷は見られなかつた。「この度は、本当にありがとうございました」

「あつ、いえ、あのですね……」

誠は目の前で起きた衝撃的な事実をありままで伝えた。両親はにわかに信じられない表情を浮かべている。少女は母親の腰に抱きつきながら口を開いた。

「そうだよお父さん。大きなおじさんが助けてくれたんだよ」

父親は娘の顔を見ている。再び崖下から香織の声が聞こえた。

「まひつちゃんつてばつ……！」

誠は思い出したかのように走り出し崖下を覗いた。香織達に無事を伝え、再び両親の元へ向かつた。そして、トラックに書かれていた吾駒運送の事を知らせると、父親は連絡してみると告げ、頭を下げてお礼を言つた。

誠は親子に挨拶を済ませ、崖を下りた。香織を呼び寄せ車へ向かつて歩き出す。しばらくすると、パトカーと救急車のサイレンが聞こえてきた。

一人は車に乗り込み旅行先へ向かう。

「あの家族、無事で本当によかつたね。でもさあ……あの時、何があつたの？ とても不自然だつた……」

どこか浮かばない表情で運転をしている誠は、見たままを話した。「えー嘘！！ 私達からはトラックもそのおじさんも見えなかつたよ……気になるの？」

「（あつ！）……ごめん。一人の時間を大切にしよう

横顔からでも分かる優しい笑顔に、香織は嬉しそうにキスをした。

後日、誠は様々な方法で吾駒運送を探したが、存在していなかつた。

第1-3話 五虎将 ～出会い～（前書き）

この作品はフィクションであり、実在する人物名、地名、団体等など一切関係ありませんので、了承ください。

第13話 五虎将 ～出会い～

北区・華艶

翔は昌也の所用に付き合い北区を訪れていた。用件を済ませた二人は122号線沿いを歩いている。太陽は真上に顔を出していた。

「おい、あいつの話長すぎだぞ……」

「悪い悪い、あーゆー人なんだよ」

Bar Changeの開業を手助けしてくれた恩人に会いに行つていたようだ。

「あーーそれより腹減った。ここはどこだ？」

「北区だなこの辺は……じゃー適当に入るか」

大通り沿いに見えた小さな中華料理店へ、一人は向かつた。

「いらっしゃいませ……」

翔は暖簾を潜つて立ち尽くしている。店内を忙しそうに走り回る中国人女性に目を奪われていたからだ。

「おい……何してんだよ。早く行けつて」

昌也にせつつかれ、空いているカウンター席に一人は腰掛けた。

注文を終えて間もなく、昌也は翔の変化に気がついた。

「お前、もしかして……」

「……な、何だよ」

横目で翔を見る昌也。翔は何も言わていらないのに顔を赤らめていた。

「……（分かりやすいなコイツ）」

「こ、この店のおく名前……何だつたつけ？」

目が泳いでいる。翔は面白しく話題を変えようとしていた。
「読めないけど、暖簾には華艶つて書いてあつたぞ」

「そ、そだよな。書いてあつたあつた」

「……（「イツまた来る気だな）」

そんな会話をしていると、厨房の奥から声が聞こえた。

「凛、運んでくれ……」

「……（あの子、凛つてゆー名前かあ）」

「……（決まりだな）」

翔は凛をじつと見つめ、落ち着かない様子だ。間もなくして、二人の注文が運ばれてきた。

「おまちどうさま」

「……に、一ーエオ……」

翔はとりあえず笑顔で話しかけた。

「何言つてんだ？ 見すぎだ、お前見すぎ……」

凛は笑顔を残し、また厨房へ戻つていった。

「まーさーやー。どうしたらいい、どうしたらいいんだ？」

「お、おー、落ち着け。腹が減つては……だ、とりあえず食つぞ！」

！」

ゆつくりと食べ始める畠也、隣からガチャガチャと音がうるさい。

翔が勢いだけで食べている。食事を終えた二人は、一息ついた。

「まあ、言いたいことは分かるが、とりあえず今日の所は様子をみよつ

「……（さつきの笑顔可愛いかったなあ～）」

「聞いてんのか。じつくりゆつくり時間をかけてだな、徐々に慣れていこう」

「わ、わかった」

「……（もうあれから何年経つんだ……複雑だな）」

畠也は遠くを眺めながら物思いにふけっていた。翔はソワソワしながら凛を見続けている。

「出前に行つてきまーす！！」

ふと店内を見渡すと数名の客しか残つていなかつた。

「……（ああ）、いつらつしゃーい
もう凜しか映つていなかつた。」

第14話 五虎将～約束～（前書き）

この作品はフィクションであり、実在する人物名、地名、団体等など一切関係ありませんので、了承ください。

第14話 五虎将（約束）

文京区・音郷道場

凛は音郷道場へ到着した。バイクを停め、インターフォンを押す。
「こんにちわー、華艶です」

「はーい。今行きまーす」

インターフォンから香織が答えた。道場の奥からバタバタと足音が近づいて来る。

「凛さん、こんにちは。遠いのにいつも『めんね』

「大丈夫だよ。いつもありがとう」

月に数回だが、出前をしている内に自然と二人は仲良くなつていた。

「みんな大好きなんだよね。華艶の炒飯」

「ありがとう。老師は元気ですか？」

初めての出前で訪れた時に、凛は爺に胸を触られた過去があつた。

「うん。今日は留守だけど。……あつ、そうだ」

今度の休みの日にも、渋谷へ買い物に行こうと誘つている。

「うん。連絡ちょうどい」

凛は、香織に笑顔で手を振り道場を後にした。

第15話 五虎将～友情～（前書き）

この作品はフィクションであり、実在する人物名、地名、団体等など一切関係ありませんので、了承ください。

第15話 五虎将（友情）

北区・華艶

その頃、翔は昌也から興味の無い話を聞かされていた。

「だ・か・ら……その【五虎将】ってなんだよ？……（凛ちゃん早く戻つてこないかなあ）」

「あー、お前長いこと居なかつたもんな……」

翔は入口を見つめ、昌也の話を上の空で聞いている。

「いつごろだつたかな、東京で最強は誰だ……みたいな話が出始め

てさ……」

「なんだそれ……ビーでもいいわ（次はいつ来ようかな……）」

突然、翔の目が輝いた。

「ただいまー！！」

「！（あつ、おかれりー）」

凛が出前から帰つて來たようだ。獣のよう（凛の姿を）田で追つて

いる。

「おい……で、墨田区の『一鉄』しかいないだろつて始まつて……」

翔は昌也に後頭部を見せている。

「23区を制覇した男だ。知つてるだろ？ 後にも先にもこの偉業を成し遂げた者はいない」

「18年も前の話だる。……実在するのかね？ ……（凛ちゃん可愛いなあー）」

「……いるだろ、バカ！！」

「次は？（俺だろ）」

「新宿区の“孤高の剣豪”『麗』。歌舞伎町NO.1ホストだ」

「知らん……（凛ちゃんこっち向いてくれないかなあ）」「裏の世界じゃー知らない奴はいないってよ」

翔：「次？（そろそろ俺か）」「ご存知『直人』！－ あいつ今“傭兵”って呼ばれてんだぜ」「何つ！－ あいつ……（直人がランクインしてるなら次こそ俺だろ）」

「そして……中野区の『誠』」

「……ぐえつ（俺じゃないのかよ）」「んつ、どうした……すげー良い奴らしいんだが……」「が？」

「一度戦闘になると全てに対応してくる天才なんだよ」

「……（あつ凜ちゃん笑ってる）」

「おそらく現時点では最強じゃねーかつて……」

「（はつ、そعد俺は死亡説が流れてたんだつけ）……ブツブツ。（だから候補にならないのか。そーだ、そーに違いない）……ブツブツ

「何ブツブツ言つてんだよ。最後の一人は……」「もういいや、興味ねえー（凛ちゃん見ていたいし）」

「はつ？」

「どーせつまんない奴だろ」「……ある意味当たつてる。……お前だ」

「だるー【五虎将】なんてつまんない奴ばっか……つて、ええ！？」

「俺はいつでもお前が最強だと信じている」「俺はいつでもお前が最強だと信じている」

「お、おお……兄弟よ。死ぬときは一緒にだよな」「……嫌、それは遠慮してくれ」

「うおおーーーーーの涙どうしてくれるんだじゃー」「うおおーーーーーの涙どうしてくれるんだじゃー」

「ねこ、アリの呪いをかぶるかー……」
翔の髪や瓶を他の客がせつづけた。

「何だと?」

「アイヤー、喧嘩はやめへーーー。」

「御意つ……」

「つゆつゆこ……武士かお爺か……（大田区のあの男がおいいこか）

「

第1-6話 治安部隊ヒート～杉並区の英雄～（前書き）

この作品はフィクションであり、実在する人物名、地名、団体等など一切関係ありませんので、了承ください。

第1-6話 治安部隊ヒート～杉並区の英雄～

練馬区：Bar Change

翔はカウンター越しに昌也と会話をしていた。

「お前、戻つてからしばらく経つけど『仁』には連絡したのか？」

「なんでイチイチ連絡するんだよ」

「お前が居ない間、結構大変だったらしいぞ」

「なんだそれ？」

「杉並区の安全神話が崩れそうになつたんだよ」

「それって勝手にあいつが言つてるだけだろ？」

「それでもないらしいぞ。実際、犯罪件数最小の区になつたみたい
だし」

「ほおーそれは3本槍の功績なのか？」

「どうだろ？ 今じゃ13番まで部隊があるらしいし」

3本槍とは、仁が代表を務める治安部隊組織の旗揚げ時より付き
従う1・2・3番隊の隊長達の事である。

「……でも、警察には煙たがられてんだろ？」

「あいつら戦闘までこなすからな……でも、区民の人気は絶大らし
いぜ」

「それで増えたのか……しあがねえなあ、今度顔でも見に行くか

……」

第17話 治安部隊ヒート～無双～（前書き）

この作品はフィクションであり、実在する人物名、地名、団体等など一切関係ありませんので、了承ください。

第17話 治安部隊ヒート～無双～

杉並区・善福寺公園

数年前に遡る。

治安部隊ヒートの事務所に、2番隊隊長の溝口が駆け込んできた。
「仁、吉祥寺の奴ら久々に善福寺公園を狙ってきたぞ！！」

「最近やつとおとなしくなったと思っていたのにな……」

「ああ、とりあえず3・7・8番隊を向かわせている

「わかった」

吉祥寺の連中が度々、杉並区の領土を狙っていた。特にこれと言った人物はなく、数任せの相手にそれほど警戒をしていなかつた。いつものように、鎮圧の報告を待っていると、9番隊隊長の三浦が駆け込んできた。

「仁さん、大変です！！ 3部隊が壊滅状態との連絡が……」

「何だと！？ 仁、全部隊に召集をかけるか？」

「まだだ、他の地区の情勢も気になる。……とりあえず向かうぞ」
仁達は急ぎ現場に向かった。

しばらくして、仁の友人である信人が事務所を訪れた。

「仁は居るかあー？」

「あっ、信さんこんにちは……」

事務所に待機している10番隊隊長の岡本。信人は事務所の雰囲気がいつもと違うことに気がついた。

「誰も居ないな……何かあったのか？」

「いえいえ、特に何もありませんよ」

「……そうか。たまには顔出しに来いつて伝えてくれ

「あ、はい、わかりました」

信人は不服そうに事務所を後にした。

その頃、仁達は最前線の本陣に到着していた。真っ先に溝口が状況を聞く。

「吉祥寺の蔵野達の仕業なのか？」

「はい。総勢150名程です。3番隊隊長：今川さん、8番隊隊長：

清水は病院へ運ばれました

答えてているのは、7番隊隊長の小木である。

「いつもの3倍近いじゃねーか」

「仁さん……申し訳ありません」

「気にするな。詳しく教えてくれ

落ち着いた表情で仁は問い合わせた。

「いつになく、蔵野の奴が正面から強気で攻めてきました

「数まかせの総力戦ですかね？」

三浦が口を挟んだ。

「最初は今川さんの活躍で驚くほど互角に戦えたんですが……」

「……どうした？」

「一人の男が現れてから状況が一変しました」

小木は、少し青ざめた顔をしている。溝口が問う。

「その男は誰だ？」

「私には分かりませんでしたが今川さんが逃げろつて……」

「至急、そいつを調べてくれ」

仁は三浦に指示を出した。

「……あいづは強すぎます」

下を向き、恐怖に怯える小木。

「……各部隊長には持ち場の治安を維持しろと伝える

「遠征に出して修行させている弘道はどうすんだ？」

「あいづは俺の後継者だ。そのまま修行させておけ」

「仁と溝口が話している。そこへ、三浦が血相を変え戻つて來た。

「大変です！！ 男の正体が解りました…… “傭兵” “直人” です！！」

「ぶー、【五虎将】じゃねーか！！」

「ああ、【無双】の使い手だ……」

慌てふためいている溝口とは対照的に、仁は落ち着いていた。すると今度は、小木が駆け寄ってきた。

「た、大変です！！ 弘道が遊撃隊になつて背後から攻めますつて

……」

「誰が連絡したんだ？」

「弘道から事務所に連絡があつて……岡本の奴、しゃべっちゃつたみたいです」

「危険ですよ！！ 弘道は『直人』がいることを知らない……」

「連絡はつかないのか？」

「何度も連絡しても繋がらないんです」

「『直人』と150に対して、こつちは遊撃隊の弘道を含めて40弱。……どうすんだ、仁？」

ずつと無言で聞いていた仁は、口を開いた。

「次の衝突の際は……俺が『直人』と戦う」

「何？」

「聞いた噂だが、1回の戦闘が100万らしい。おそらく藏野達じやー200万を集めるのが精一杯だろう」

一同がその話に沈黙している。三浦が口を開いた。

「次の戦闘で資金が足りるつて事ですか？」

「おいおい、そんな噂信じるのか……」

「『直人』をえいなれば何とかなるだろ？」

「馬鹿言つた俺が行く。簡単に大将を出せるかよーー！」

「俺がいきますよーー！」

「……立ち向かっていけるか自身がありません」

「無理はしなくていい。【五虎将】の戦闘を目の当たりにしたんだ

……

怖がる小木に優しく微笑んだ。

「お前も十分体験してるだろ?」

無言の溝口に、仁は語り掛けた。

「絶対的不利な状況だ、作戦を練るぞーー!」

善福寺公園入口。日が沈み、辺りは暗闇に包まれていた。

見張りの前に信人が姿を現した。

「うつひやつひや。……ういー」

「な、なんだこの酔っ払いは……おい、おっさん。ここで何をして
いる?」

「池で魚でも釣ろうかと思つてねえ」

「もう夜だ。それに状況が見えないのか……今ここは戦闘地区なん
だよ」

「えつ!! 魚が寝てるって……」

「言つてねえよそんなこと……怪しきるがゆうや」イイチは。とつあえず
連れて行くか?」

「ちつ、しようがねーな

見張りの数名が面倒臭そうに信人を連行していった。その頃、敵

陣の背後に到着した弘道と補佐役の佐助。

「どうにか間に合つたみたいだな」

「ああ。妙に静かだぜ」

「これからどうする?」

「とりあえず、仁さん達の動きを見極めないとな

「それにしても数が多くないか?」

「いつもの倍以上はいるな……」

本隊の動きを見極めようと、13番隊の10名が敵陣の背後で息
を潜める。

連行された信人は敵の本陣へ到着していた。

「失礼します。入口に変な奴がいましたので連れてきました」

「んーなんだ?」

蔵野は入口を振り返った。

「つい~ひいっく。……『苦勞様』

豪腕をうならせ見張りの数名を吹っ飛ばした。

「敵だ!! 集まれ!!」

蔵野の叫び声に、すぐさま20名程の兵隊が集まつた。

「敵本陣に一人で来るとは……いい根性してるな」

「友の危機なんでな。……暴れさせてもらひつぞ」

豪腕のうなりに敵兵は次々と倒されていく。

「何者だ、貴様?」

「ただの酔っ払いだよ。……覚悟しな」

「うわあ!! ……直人さん、直人さん」

歩み寄る信人に恐れをなした蔵野は、直人の名を叫びながら本陣の奥に逃げ込んだ。

「……苦戦してる理由つてそーゆー事か」

信人は歩みを止め、顔が引き攣つっている。まもなくして、奥の部屋から直人と蔵野が何やら話をしながら姿を現した。

「この戦闘で終わりだが……いいんだな?」

「ああ構わねえ。(また『清』さんに連絡すればいいぞ)」

直人は信人を見た。

「じゃあ……始めようか?」

「待て、ここじゃ狭い。外で存分に楽しもうじゃねえか

「……お好きなように」

信人は外に出るなり、すぐさま大木を引き抜き手を加え六角棒を作った。

「うわっ、なんだこいつは!!」

それを見ていた兵隊が驚いている。信人は片手に携えた六角棒を直人に向けた。

「なにか不服でも？」

「……問題ない」

「そんじゃー遠慮なくいくぞ！…」

大木並の六角棒を小枝を振るうようにブンブンと振りまわす。直人は軽々しくそれをかわしている。

「ちつ、全然あたんねー……年は取りたくなーな」

攻撃し続けるが、疲れの色が出来ていた。

「終わりか？　じゃあ、こつちも遠慮なくいくぜ（【呪縛・無双】）

「無双」古の武将達の呪いにより、あらゆる武器を使いこなす。突如、直人の手に長槍が現れた。

「【無双】の力か……（やばい、俺も変身を……）」

「無双・螺旋突！」

閃光の一突きが信人を貫いた。

「……ぐはっ（ちつ、間に合わなかつたか）」膝から崩れ落ちた。

「決まりだな」

蔵野は不敵に笑っている。

「仁さん、敵陣が慌しい動きをしております」

「……」

「弘道達じゃねーだろうな……」

「突っ込みますか？」

「……暗くて判らないがもう少し様子を見よつ

「うおつ、なんだ今の稻妻みたいな青光りは？」

「！　……全員突撃！！」

「よつしゃーいくぞー！！」

身を潜めていた弘道と佐助。

「動いた！！」

「……総攻撃か？俺達も突撃だ！！」

本陣の動きに呼応するよつこ、背後から急襲する。

本陣に戻っていた蔵野の元へ報告が入った。

「大変です！！ 敵の総攻撃が始まりました」

「何が大変なんだ。3倍近い兵隊がいるんだぞ……潰せ……」

「帰るぞ……」

「えつ…… あつ、ちょっと待つててくれませんか？」

直人の帰るそぶりを見て慌てた蔵野は、急いで連絡をしてくる。

「もしもし、『清』さんですか。……な状況でして」

「くつくつくつ、楽しませてもらつたぜ……。諦めろ、追加融資はもうできんな……」

電話の相手からの言葉に、蔵野は腰を抜かした。そんな蔵野に、次々と報告が上がってくる。

「大変です！！ 背後からも敵が現れました」

「……ひい」

直人が去り。数だけの蔵野達は全滅した。

第1-8話 パンダマン～歡喜～（前書き）

この作品はフィクションであり、実在する人物名、地名、団体等など一切関係ありませんので、了承ください。

第18話 パンダマン～歓喜～

練馬区・Bar Change

夜9時、店は最高潮の賑わいを見せていた。忙しく動き回る昌也の携帯に翔からの着信が入った。

「昌也、やつたぞーー！！」

大きな叫び声が鼓膜を直撃した。あまりの衝撃に、昌也は携帯を遠く離し手で耳を塞いでいる。表情は歪んでいた。

あの日以来、翔は華艶に通い続けた。そして、ついにデートの約束をした直後だつたらしい。遠く離した携帯から、喜ぶ声が聞こえるほどだった。

「お、おめでとう……で、どこに行く予定なんだ？」

「おお、パンダが見たいって……」

「そしたら上野動物園か？」

「そうそう。でさ……」

店の営業を終え、昌也は径子と酒を酌み交わしながら話をした。

「恥ずかしいから俺達も来いって……」

「わあー、私もパンダ見たい！！」

「勘違いするなよ。翔を影から見守る役目だからな……」

昌也はまだ耳鳴りがするのか、耳を気にする素振りをしていた。

第1-9話 パンタマン～ションマオ～（前書き）

この作品はフィクションであり、実在する人物名、地名、団体等など一切関係ありませんので、了承ください。

第19話 パンダマン～ショコラ～

台東区・上野駅

デート当日、快晴だ。あたかも天が一人を祝っているかのようだつた。翔は緊張した面持ちで待ち合わせ場所にいた。しかし、30分が過ぎても凛の姿が見えない。

「……（も、もしやドタキャン？）」

最悪の事態を思い浮かべ、緊張と焦りで落ち着かない様子だ。その姿を物陰から見守るように、昌也と徑子の姿があつた。

「遅いね凛ちゃん……あつ、来た！！あれそうじやない？」

無言のまま翔を見ていた昌也は、安堵の表情を浮かべている。

「遅くなつてごめんね」

翔はチャイナドレスを身に纏つた姿に見とれている。とても幸せそうな顔だ。

「ねえ？……行こうよ」

「お、おお（可愛いなあ）」

まだ手こそ握れないものの、寄り添つて歩く一人。

「なんだか翔さん、幸せそうだね」

「ああ、幸せになつてもらいたいな……」

台東区・上野公園

上野動物園の入口に到着した翔と凛。そして、気づかれないように尾行する昌也と徑子。翔は係員の手に持つているプラカードを見て青ざめた。

「うげつ！！ 入場制限だと……」

動物園は連日の大盛況。パンダの人気を甘く見てはいけない。

「只今、大変混雑しております為、……」

係員がメガホンで何やらアナウンスをしている。

「さ、3時間待ちだと……」

翔は呆然と立ち尽くすしかなかつた。凛は残念そうな表情を浮かべている。もちろん昌也達にも情報は伝わっていた。

「凛ちゃんって仕事あるんだよね？」

昌也はなんとも言えない表情をしていた。

「残念だけど、しょうがないよね……」

「……（こんな俺に神様は微笑まねえか）」

「仕事まで時間あるし、公園内を散歩でもする？」

凛は笑顔で話しかけた。その笑顔に癒され、一緒にいれる事に幸せを感じた。翔に笑顔が戻り、一人は不忍池の方向に向かつて歩き出した。その姿を見届けた昌也。

「大丈夫そうだな。よし、俺達もどつか行くか？」

「映画を見たーいー！」

昌也と径子は、仲良く手をつなぎ映画館へと向かつた。

不忍池に沿つて歩く翔と凛。仲良く歩く姿に初々しさが漂つている。

「ん？ あれは……」

そんな姿を見ていた的屋が何処かに連絡をしてている。

「どうした？」

「若頭、翔の奴が目の前を歩いているんで……」

「ばかやううーー！ そんな事でいちいち連絡してくるな

「あ、はい。すいません」

「それより、ちゃんと売れてんだろうなあ……たこ焼き？」

「そ、そりゃーもちろんですよ……はは

「どうやうこの的屋、【侠狼会】の者らしき。

そんな的屋の慌てふためく姿など御構い無しに歩き続ける翔と凛。

至福の時が流れている。

「でも、3時間待ちだなんて驚いたね」

「いつその事、パンダが檻から脱走してしまえばいいの……」

「あはっ、入場制限しなくてすむもんね」

しばらく散歩していると会社員と思われる30名程の集団が宴会をしていた。会話が弾み、幸せそうな一人が横切る姿を見ていた。
「ヒコー・ヒコーお一人さあ～ん、これからどちらまで～」
「そりや～そちらに向かつて歩いてるんだから、聞かないで～」
酔っ払い達の野次が飛ぶ。

「野郎……」

「翔。喧嘩はダメだよ」

凛の言葉にその場をやり過げたとする翔。

「中国人を相手にいい気になるなよ～」

「いやあ～あれば「スプレ好きかもしけんぞ」
ギヤー・ギヤーと野次がエスカレートしていく。

「私は大丈夫よ。こ～ゆーの慣れっこなんだから……」

凛の笑顔だけが翔を押し留める唯一の救いだつた。

「へつ、可愛い顔して売春なんじやねーのか。お金なら沢山……」

凛の表情から笑みが消えた。その瞬間だつた、翔は集団に向かつて走り出した。

「テメーラみたいな奴らがいるから、何もかもが歪むんだよ……

うおお……（我に眠りし修羅よ今日覚めよ）」

「翔！～」

瞬時に野次を飛ばしていた5人の顎を碎き、残りの集団に殺氣を放つた。恐れ慄きながら減らず口を叩く会社員。

「お、お前、亀柴商事に手をだして、ぶ、無事でいれると思つなよ
「亀柴商事ですつて……」

何やら凛の表情が硬い。

「だまれ狐共がつ～～ 虎のお出ましを待つてやるから早く呼べ

や……」

翔は目で会社員達を殺している。

「翔、もうやめて……」

「呼んだかね？」

「どこからともなく声が聞こえた。辺りを見回し、ざわつく会社員達。

「どこだ？」

「いた……あそここの屋根の上だ……」

発見した会社員が指差す先に、背を向け立王立ちしている何者の姿があった。翔と凛もその先に視線を向けた。

「……本当に脱走？」

「シュンマオ！！」

凛に笑顔が戻り、目が輝いている。会社員はその異様な姿にざわついている。

「なんでパンダがここにいるんだ？」

「馬鹿、どう見てもきぐるみだろ……」

「何者だお前は？」

パンダのきぐるみを着ている様に見える。男は振り返つて語り始めた。

「俺の名は“パンダマン”。平和とパンダをこよなく愛する正義のヒーローだ！！」

事態がよく飲み込めないのか、静寂が辺り一面を覆いつくした。自分でヒーローって言つちゃつたぞ、あいつ……」

会社員の一人が口を開いた。

「ちつ、ただの変態か……」

翔は見下した目線でパンダマンを見ていた。

「大丈夫だよお嬢さん、何も言わなくていい。状況は把握できた……」

屋根から飛び降りたパンダマンは、一目散に翔を目掛け襲いかか

つた。

「お前が悪の元凶だな……問答無用！！」

「ちょ、ちょっと、違う……」「……」

「……邪魔だ」

翔の裏拳でパンダマンはあつさりぶつ飛んでいった。

「……弱つ！？」

会社員の面々はあまりの弱さに驚いた。

「ちつ、邪魔が入ったが亀柴商事が何だつて？」

再び会社員達に向かつて歩き出す。すると背後から氣配を感じ、翔は振り返った。

「（【変身：鬼熊】）俺をこの姿に変えさせるとは……」

（鬼熊） 熊の妖怪。怪力の持ち主で、人と同じように直立歩行し、家畜の牛馬などを襲つ。

パンダマンは【妖怪：鬼熊】に変身していた。

「どつちにしろ、俺には勝てんと思うが……」

「ぐがああ……！」

雄叫びと共に振り下ろされる熊手。防御はしたが、その威力をまともに受けた翔は片膝を着いた。

「くつ……（パワーはあるみたいだな）」

翔とパンダマンの一身一体の戦闘が続く。会社員の一人が何処かへ連絡をし始めた。

「もしもし、社長ですか。お忙しい所申し訳御座いません」

「どうした？」

「上野公園で飲んでるんですが……」

社長に状況を伝え、助けを求めるている。

「ほお……（“皆殺”の翔だな……）」

「……どうしたらよろしいでしょうか？」

「お前達じや 100人いても敵わんよ。今のうちに逃げときな

「……はい。分かりました」

全員にその旨を伝え、翔とパンダマンの戦闘が続く中、隙を見て次々と逃げていった。

「ちつ……（しぶといな。）」ちも全力でいくか」「ゼヒ……ゼヒ……（なんだこの強さは……）」

（【潜在：ヘーパイストス】）火鳥扇！――

（ヘーパイストス）ギリシア神話の火山・炎・鍛冶の神。

翔とパンダマンの間を火炎の扇が通過した。翔は目を真ん丸にして凛を見ている。

「ショーンマオ……ちょっと待って……」

凛は火鳥扇を持ったままパンダマンに近づいて行った。

「アチツ！！（動物に火を向けないで……）」

「勘違いよ。悪いのは……」

凛が見た先に会社員達の姿は消えていた。

「あのね、この人は……翔は私の……」

「……えつ（何？）」

翔はドキッとした表情で凛を見ている。

「冷静に状況を把握したんだが……私の勘違いでしたね」

「あつ！！（こらパンダ野郎、話を遮りやがって）」

翔はパンダマンに向けて変な顔をしている。

「大変申し訳かった……危うく怪我をさせてしまう所でした」

「こらこら……（よく状況を見ろ！）」

翔は怪我をしてるのはお前だよって顔をしてくる。

「助けてくれようとしたんだね。シェイシェイ」

「なあに、礼には及ばん。正義のヒーローの宿命さつ……」

言いたい事を言い切ったのか、パンダマンはふらふらとよみがめきながら去つて行つた。

「ちつ、あいつのせいで逃がしちまつたじゃねーかよ……」

「翔……ありがとう」

涙ぐんでいる凜をそっと抱きしめよつと両腕を広げた。

「あつ、大変！！ 仕事の時間に遅れちゃう。帰らなきや……」

両腕は広げられたままフリーズしていく。

「そ、そうだね。帰ろっか……」

次に会う約束を言い出せないでいた。

凜を上野駅まで送り、翔は一人公園のベンチでたそがれた。

第20話 靖国神社へ参拝へ（前書き）

この作品はフィクションであり、実在する人物名、地名、団体等など一切関係ありませんので、了承ください。

第20話 靖国神社へ参拝へ

千代田区・靖国神社

蝉の歌が最盛期を迎えていた。降り注ぐ日差しが心地よさを通り過ぎ苦痛に変わる季節。

翔は昌也に誘われ、見知らぬ場所をひたすら歩いていた。
「なにつ!? それで抱きしめられずに帰つたのか……」
「……うるせえなあ」
「つたく、情けねえ。そこは抱きしめるだろ絶対に……」
「どうやらデートの出来事を話しているようだ。」
「……それより、何処に向かつてんだよ?」
「んつ、靖国神社だ」
「神社だと!? ……俺は用がねえから帰るぞ」
「まー付き合えよ、参拝するだけだからさ」
「参拝? 近くの神社で済ませばいいだろ」
「この時期は特別なんだよ……」

一人が境内の入口に到着すると、そこには大勢の警察官がいた。
「おい、警察官が入口を固めてるぞ。目的は俺か?」
「……馬鹿。警備に決まつてんだろ」
「な、なんで警察が神社を警備するんだよ?」
「この場所は、今日が一番危険な日でな……」
昌也は説明するのも面倒臭くなつたのか、境内へ入つて行つた。
翔は警察を気にするようにチラチラと見ながら昌也の後を追つた。
「いやあ~暑いですね。署長自ら警備に付かなくても……」
「……上からの命令だよ」
司はあからさまに不満な顔をしていた。

翔と昌也は境内のジャリ道を歩いていく。すると車道の方から演説が聞こえ、「一人は振り向いた。

「……の行為に対し、多くの国民やアジアの近隣諸国が……」

選挙カーの上から政治家が汗だくになつて話をしている。

「つたぐ、このへや暑いのに大声でつるをこんだよ（あれ、どつかで……）」

「うわっ……こんな所で一郎さんに会えるなんて……」

苛々している翔とは対照的に、昌やは皿を輝かせて政治家を見ている。

「……は？」

「お前の事だから知らないとは思うナビ……一郎さんはなあ、この国将来を本気で考えてくれている最後の大物なんだぞ……」

政治・経済について熱く語り始めた。

「あ、ああ、息苦しい……」

暑さに加え、昌也が語る訳の分からぬ話が翔の脳みそを混乱させた。

ジャリ……ジャリ……。翔は白杖を手にした視覚障害者が向かってくる音に気がついた。

「おこ昌也、じゅまだから道をあけろ（むむつ、びつかで見た気が……）」

翔の声に、熱中していた昌也も気づき道をあけた。

「すいません、どうぞ……」

「ご親切に、ありがと」「わざわざ」

ジャリ……ジャリ……。歩行者はお礼を言つて通り過ぎていった。昌也は無言のまま見ている。

「……（あの人、もしかして）」

「気の毒だつて思つたら失礼なのは分かつているけどね……」

翔は視覚障害者の背中姿を見つめながら、大変そだなつて表情を浮かべている。

「……平和で豊かなこの国を……」

「つるせえなあ……まだ話てんのか」

「お前なあ。一郎さんって人はだな……」

話が振り出しに戻ってしまった。翔は両耳を塞ぎ、神社の方向へ歩き始めた。

神社に近づくと、大慌てでウロチョロウロチョロしている巫女がいた。

「ああーどうしましょう。よそ様の所は使い勝手が解かりませんわ」

「おっ！　巫女がいるぞ」

「神社なんだから当たり前だろ……」

「あーはいはい。さっさと参拝終わらせよつぜ」

二人は神社へと消えて行つた。

第21話 靖国神社 ～リジュー～（前書き）

この作品はフィクションであり、実在する人物名、地名、団体等など一切関係ありませんのでご了承ください。

中央区・リジューーム

銀座NO.1ホステスの美咲が経営する高級クラブである。

銀座のきらびやかな風景を更に引き立てる豪華な建物は、道行く人の目を引いた。そこへ、演説を終えた一郎が足を運んでいた。

「先生、今日の演説お疲れ様でした」

「ふははは、さすがママ。もう情報が……」

「ふふ。私の知らない情報などありませんわ」

経済界から裏社会まで、美咲の交友関係は広い。

「今日はとても多くの皆様に聞いて頂けた……」

今から演説を始めるかの様に、まだまだこの国は良くなると熱く語り始めた。

「相変わらず真面目で熱い人ね」

「志を繕して……もう20年か」

志や熱い思いだけでは、国を変えることが出来なかつた。今、その一つ一つを思い起こし溜め息をついている。

「ふふ。あの頃の先生は可愛かつたわ……」

「い、いらっしゃ……恥ずかしいからその話はやめてくれ」

今年で歳63を迎えた。議員1年目、駆け出しの頃の自分を思い浮かべ照れている。

「しかし……いつまでもママは美しい、あの頃のままだ

「ふふ。お上手ですね、先生」

一郎はお世辞ではなく本音でそう言つてゐる。瞳を見つめていると知らぬ間に美咲の魅力に吸い込まれていた。

「先生、そんなに見つめられたら恥ずかしいですわ」

「えつ、あつ……あの、弟さんは元気にしてますか?」

「お蔭様で、その節は……」

美咲は深々と頭を下げている。

「で、では。そろそろ……」

帰ろうとする一郎に美咲が耳打ちをした。

「先生、最近不穏な動きが御座います。ご用心を……」

「ありがとう。では……」

一郎はリゾームを後にし、事務所へと帰つて行つた。

第22話 靖国神社 ～刺客～（前書き）

この作品はフィクションであり、実在する人物名、地名、団体等など一切関係ありませんのでご了承ください。

第22話 靖国神社（刺客）

千代田区・某所

日付が変わる頃、車を降りた一郎は事務所へ到着していた。ドアを開けると、遅くまで残っていた秘書が出迎えている。

「先生、おかえりなさい」

「ああ、遅くまでご苦労様」

「あの、ご友人の方が奥の部屋でお待ちですが……」

「分かつた、ありがとうございます」

「先生はお茶でよろしいですか？」

「ありがとうございます。今日は一日疲れたる、もう帰りなさい」

「あつ、はい……」

一郎と友人の邪魔をしてはいけないと、秘書は身支度を済ませて帰つていった。

一郎は秘書の姿を見届け入口のドアに鍵をかけた。そして、奥の部屋へと入つて行く。中には男が一人、背を向けソファーに座つている。一郎は反対側に腰掛けた。

「ご配慮、ありがとうございます」

「……で、用件はなんだね？」

「本日の演説はとても良かつた、と伝言を預かっております」

「それはどうも……」

一郎はこの男と面識がない。しかし、何故ここに居るのかは大体見当がついていた。

「しかしながら、いつまで続けても何も変わりませんよ」

「ふははは、それは最後まで判らんだろう……」

「残念ですが、今日がその最後の日……」

突然、男は隠し持つていた短刀をチラつかせ立ち上がった。

「刺客が……だいたい見当はついているがな。お前さんは“国取り”的の手の者だろ?」

「……そこまで分かつてはいるとは、流石だな」

「お前!」ときでは殺せんよ……」

「ほざくな老いぼれ!!」

一郎は一人の間にある机を咄嗟に蹴った。男は弁慶の泣き所に机があたり、短刀を握つたままうずくまつてはいる。

「悪いがまだ死ぬ訳にはいかんのでな……（【変身・閻魔】）」
（閻魔） 仏教の地獄の主。冥界の王・総司として死者の生前の罪を裁く者。

一郎の姿は巨大化し【閻魔】に変身した。その姿を見た刺客は、恐れ慄いてはいる。

「この姿を見たからには死んでもいいつ……魔道波!!」

一郎の掌から暗黒の波動が解き放たれた。あっけなく刺客の姿は、溶けて消えてはいった。

第23話 歌舞伎町～トレーダー～（前書き）

この作品はフィクションであり、実在する人物名、地名、団体等など一切関係ありませんのでご了承ください。

第23話 歌舞伎町 ハトレーダー

品川区・某所

「あん……もう……そう、そっち……」

トレーディング画面を眺めている。自宅で一人、瞳は咳いていた。世界中が不況一色で染められたこの時代。個人投資家として日々画面に向き合う生活を送っていた。

「うん、今日は300万円の利益か……」

世間では耳を疑いたくなるようなお金の動きである。

「……あそこで仕掛けていたらなあ～」

一瞬の判断ミスが多額の損失に直結する世界。

「でも、タラレバ言ってちや駄目だよね

……運命と同じよう」。

「うーん、為替はいいかな（動きがなさそうだし）」

気分転換にと携帯を手に取り夕食の誘いを友人とした。

新宿区・アルタ

瞳は、待ち合わせの時刻より少し早めに着てしまい、アルタ前を行き交う大勢の人々を見ていた。

「あの映画良かつたな……香織は泣きすぎだけど」

「だつて本当に泣けたんだもん。まこつちゃんだつて……」

通りすぎるカップルの会話が聞こえてきた。

「……（デートかあ）」

異性との触れ合いからすっかり遠ざかっていた。

「（めーん。待つた？）

「私も今来た所よ……」

恵子が姿を現した。看護学校の時の友人である。一人は高級レス
トランへと入つて行つた。

「でも、瞳が看護職から離れるとは以外だつたわ」

「……そう？」

「だつてあなたは主席で卒業して、あんないい病院に就職したのよ

……」

瞳は優秀な看護師として将来を期待されていた。

「……。でも、恵子が今日お休みで良かつたわ」

「タイミングだけはいいのよねー私

「お仕事は、順調？」

「そうね。色々あつたけど順調よ」

友人の幸せそうな表情に笑みを浮かべている。

「今はそのトレーダーって仕事をしているの？」

「うん。仕事つて呼べる程の物じやないけどね」

「難しそうで私には分からぬわ……それよりね……」

「恵子は最近通い始めたホストの話を始めた。

「そうなんだ。でも、あまり興味がないわ」

「瞳も長い間彼氏いないでしょ。社会勉強だと思つて、どう？」

「社会勉強だなんて、都合のいい話である。

「（夕食付き合つてくれてるし）……今日だけだからね」

「うん。わかつてる」

二人は歌舞伎町へと向かつて行つた。

第24話 歌舞伎町「デュアルコア」（前書き）

この作品はフィクションであり、実在する人物名、地名、団体等など一切関係ありませんのでご了承ください。

第24話 歌舞伎町～デュアルコア～

新宿区・デュアルコア

歌舞伎町N.O.1の麗がいるホストクラブである。接客中の麗にホストが耳打ちをしている。

「美雪さんにお見えです」

「うなずく麗。もうすでに10名以上の指名客が来店していた。申し訳ありません。指名が入ったようなのです……」

「ええーもういっちゃんの？」

「すぐに戻って来ますよ……」

麗は甘いマスクで微笑み、その卓を離れて行つた。

「どうも初めまして静香さん！！」

指名者が卓を離れると、ヘルプがその卓を受け持ち盛り上げる。初めてじゃないでしょ、あなた……」

「あははは、ばれました……」

「あーあ、やつぱり高いお酒でも入れないと困ってくれないのか

しら……」

そんな時、店内に響き渡るようマイクパフォーマンスが入った。

「8番テーブルのお客様より、ドンペリ・プラチナ頂きましたー！」

「ありがとウイザードまーすー！」

「ホスト……集合ー！」

合図と同時に店内のホスト達が8番テーブルを囲みパフォーマンスが始まった。シャンパンなどを注文するといつもったサービスが受けられる。

その頃、瞳と恵子はデュアルコアに到着していた。

「いらっしゃいませ恵子さん！！」

ホストに名前を覚えられる程、恵子はこの店に通っていた。

「お隣の方はご友人ですか？」

「初めてなの。S券で入れるかしら？」

「もちろん大丈夫ですよ」

一人は席へと案内された。店内は薄暗いが高級感が味わえる豪華な造りになつていて、まもなくして、恵子ご指名のホストが現れた。「恵子さんいらっしゃい！！ お友達の方初めまして達也です！！」異様にテンションが高い。瞳は軽く会釈をした。指名者がいない瞳のようなフリーのお客に対しては、まだ駆け出しのホストや指名を取り扱うのが通常である。

「ねえ達也。麗さんをここに呼べないの？」

「えっ！！（NO・1ホストがS券に来る訳ないだろ）」

「私の友達なの、美人でしょ。楽しませてあげたいのよ……」

「……無理だよ」

「またそー言って、麗さん呼べないんでしょ？」

「……（当たり前だ！！）」

二人の会話を聞き入っているだけの瞳。

その時だった、瞳達の卓の前を偶然にも麗が通り過ぎた。

「あっ、麗さん！！」

恵子の呼び止める声に麗は立ち止まり振り向いた。

「いらっしゃい。恵子さん」

「あの、友達なんですが……」

麗は恵子の隣に座つて、瞳に目を向けた。しばらく無言で見つめ合つ一人。

「後で来てもらえませんか？」

「もちろんですよ」

麗は微笑みを残し次の指名客の元へ向かつた。

「はあ……素敵。指名変えちゃおうかしら？」

「おいおい。俺は心臓がバクバクしてたぞ……」

「あの人……（とても哀しい目をしてた）」

営業時間も終わりに近づき、ベベレケな達也と恵子。代わる代わるホスト達は来るものの、麗の姿は無かつた。麗の存在・瞳の存在も忘れてしまい、達也と恵子は一人で何処かへ行ってしまった。

「あーあ、私も帰ろ」

取り残された瞳は、一人店を後にした。

第25話 歌舞伎町 ～一番街～（前書き）

この作品はフィクションであり、実在する人物名、地名、団体等など一切関係ありませんのでご了承ください。

第25話 歌舞伎町（一番街）

新宿区：一番街

午前4時前後、歌舞伎町が最も危険な時間帯を迎える。

始発待ちをしている一般人の酔っ払い・お茶引きホスト達のキャラ、麻薬の密売人・付随したチンピラ、ゴロツキ達。そして何よりも最も危険な繁華街、眠らない街：歌舞伎町。その元締めの組員達が蠢いている。

そんな凶悪な輩達に目を光らせている歌舞伎町交番の精銳警察官。まさに一触即発のピークを迎える時間帯に、瞳は何も知らずに一番街を歩いていた。

「まだ、時間早いけど始発動いてるかな」

「ママ劇付近に差し掛かった時だつた。案の定、ゴロツキ達に取り囲まれる。

「……（ちょ、ちょっと何？）」

それを見ていた組員達が近寄ってきた。すぐにゴロツキ達は逃げ去る。弱肉強食の世界。

「ほお～こりや上玉だな」

瞳を囲む組員達の元に車がまわされ、連れ去られる瞬間だつた。

「俺の連れだが何か？」

そこには麗の姿があつた。

「なんだあ～……へつ、ホストかよ。ホストごときが首を突っ込むんじやねえ！～」

麗は3人の組員に囲まれた。

「お前ら【侠狼会】の者か？」

「知つているなら話は早え……判るよな？」

「麗さん……」

瞳の眩きを聞いた他の組員が叫んだ。

「麗だと！？…………お前ら手を出すな！！」

時既に遅し、3人は地べたに転がっていた。

「ちつ……女は返せばいいんだろ。行くぞ！……」

【侠狼会】の連中は車に乗り込み、逃げるようになつて行つた。

麗は瞳の元へ優しい笑顔で歩み寄つた。

「あの…………ありがとうございました。ご迷惑をお掛け致しました……」

「とんでもありません、私の方こそ約束を守れなくて申し訳なかつた……」

麗は卓に来ると言つた約束を守れなかつた事を詫びている。

「よろしければ、始発までお話ししませんか？」

投資家とホスト。畠は違えど、己の裁量のみで生きる共通点に瞳は心を開き始めた。

「…………はい」

一人は朝靄のかかる場所へと姿を消した。

第26話 刺青～侠狼会～（前書き）

この作品はフィクションであり、実在する人物名、地名、団体等など一切関係ありませんのでご了承ください。

第26話 刺青 → 侠狼会

板橋区・侠狼会事務所

今は亡き初代侠狼会・会長。名立たる勢力を駆逐し、至弱から至強の組織へと導いた偉大なる人物。その血を受け継ぐ重慶、若干28歳。現在は父親である三代目会長が君臨しているが、とにかくこの親子……とても仲が悪い。

ある日、重慶は大きなソファーに腰掛けていた。両腕と腰元に裸の妾を侍らせ、快樂に浸っている。そんな最中である、部屋の扉が開き若い衆が入って来た。

「若頭、本隊の奴らが『麗』とトラブルになったとの情報が……」

「……『孤高の剣豪』か？」

「はい、出動命令が出ておりますが……」

「放つておけ……つたぐ、自分のケツぐらい自分で何とかしろってんだ！」

怒気を含んだ言葉に、腰元の妾がビクッと反応した。

「おつ、すまねえ驚かせたな。続けてくれ……」

妾の背筋を撫でながら目を瞑り、再び快樂に浸っている。

「それよりも、亜門会の動きは掘めたのか？」

重慶の問いかが聞こえたのか、部屋の扉が開き一人の男が入ってきた。

「それは私からお話しましょ」

「李伯か……『翔』の件はご苦労だつたな」

「いえ、これで本隊も簡単には手を出せないでしちゃう

「あいつとの決着は俺が着けるんだからよ……」

「目を見開き、不敵な笑みを浮かべている。

「若、亜門会についてですが……この一年足らずで急速に成長して

おつまます

「資金源でも確保したのか？」

「詳細は掴めませんでしたが、何者かが後ろ盾している事は確かです……」

「麻薬の売買までは手を瞑つてやるつもりだったが……」

急速に勢力を拡大させている亜門会。特に敵対的関係でもなく、度々侠狼会の島に姿を現していた。しかし、人身売買にまで手を染めた輩に、道無きと判断した重慶の怒りを買ってしまった。

「決行日は今夜だ。あいつらにもそう伝えておけ……」

「……わかりました」

李伯と若い衆は部屋を後にした。

第27話 刺青～極道～（前書き）

この作品はフィクションであり、実在する人物名、地名、団体等など一切関係ありませんので、了承ください。

第27話 刺青 → 極道

板橋区・亜門会・布佐の屋敷

広大な中庭を有し、古びてはいるが屋敷の大きさだけは豪邸を連想させる。部屋でくつろいでいる布佐の元に、侵入者の報告が入ったのは日が沈んだ頃だった。

「会長、『傭兵』が侵入者を捕らえました！」

報告を届けに組員が部屋に駆け込んだ。まもなくして、犯人が連行されてきた。両手を後ろに縛られ猿轡を噛まされている黒装束の女。続いて直人が部屋に入つた。

「ん、女か？　まさか本物の忍者ってことはないよな……」

女の出で立ちに布佐は驚いた表情をしながら歩み寄つた。そして、

自ら顎を掴んで顔を持ち上げ、耳元で囁く。

「お前も運が無い、直人がいる日に進入してくるとは……」

「用件は済んだな。帰るぞ……」

「ああご苦労様。『清』さんによるじく伝えてくれ……お前達、お見送りだ！」

組員達に直人を見送らせ、布佐は部屋に鍵をかけた。そして、捕らえた女を大の字にして机に縛り付けた。

「さてお嬢さん、コスプレなのか、それとも本物のくノ一なのか……」

歩きながら布佐は話している。そして、奥から箱を持ち出し卑猥な玩具をちらつかせた。

「じつくりと体に聞いてみるとしよう……」

布佐は服を引き裂き、露になつたそれ達に刺激を加える。微動だにしない女の姿を見て頬が緩んだ。くノ一とは、幼少の頃からこのような訓練を受けていると伝えられている。

「本物に出会えるとは光榮だ。……で誰からの依頼かね？」

女は無言のまま口を閉じている。

「……では、言いやすくしてあげようじゃないか」

布佐は金庫から持ち出してきた注射器を女に見せている。中には薬物らしき液体が入っているのが見て取れた。

「素直な自分に戻してあげるよ……」

「……そろそろかな」

虚ろな目をしている女。膨張している一つの山の頂上を、布佐はやさしく摘んだ。全身に進る快感に、女は目を見開いた。

「うつ……」

その反応に、布佐は満面の笑みを浮かべていた。口では尋問を続け、手にした玩具で全身の反応を確かめている。女は必死に逃れようとするが、仰け反る体勢が精一杯であった。

「んん、どうなんだ。そろそろ言いたくなつてきたのか？」

女の喘ぎ声が鳴り止まない。そんな悪趣味が続く中、凄まじい爆発音が聞こえ布佐は手を止めた。

「何事だつ……！」

布佐の叫び声に、扉の向こう側から組員の報告が入った。

「侠狼会の襲撃です……！」

「ちつ、取り合えず応戦しろ……！ それと直人を呼び戻すんだ……」

布佐の屋敷、敷地の正面入口。

頑丈そうな鉄門に侠狼会がバズーカー砲を打ち込んでいる。

「はつはあー、どんどんぶち込め……！」

重慶は爆発音の度に崩れる鉄門を見ながら血をたぎらせていく。「門が開いたぞ……！」

「突撃……！」

李伯の開門を告げる声を聞き、重慶は一人突っ込んで行つてしまつた。

「あー若頭！！」

いつもの事ながら無鉄砲な重慶の突撃に組員は手を焼いていた。しかしながら流石である、一同はその行動に呼応する。

広大な中庭で待ち構えていた亞門会と銃撃戦が始まった。目の前の敵を次々と撃ち倒し、重慶と数名が屋敷に辿り着く。中へ突入すると、外とは別世界の静寂に包まれていた。重慶は布佐の名を叫ぶが、声だけが木霊した。

「出でこないんじゃーしようがねえ……」

重慶は懐からマグナム・ウルフを取り出した。そして、吹き抜けの空間へ向けて構える。

「頼んだぜ……（【操術・送り狼】）」

（送り狼） 狼の妖怪。山道を歩くと後ろからぴたりとついてきて、転んでしまうとたちまち食い殺されると伝えられている。

【妖怪・送り狼】が姿を現し放たれた銃弾に宿つた。意志があるかのように、目標へ向かつて飛んで行く。重慶は導かれるように後を追つた。辿り着いた先は2階の部屋だった。扉を蹴り壊し、中へ入つて行く。

「見いーつけた……」

布佐は咄嗟に銃を構えようとするが、それより先にマグナム・ウルフが額を打ち抜いていた。一段落していると、ふと視線を感じ振り向いた。

「…………何だこの裸のねーちゃんは？（！…）この刺青は……」

女の左胸にある刺青を見た重慶は、すぐにこの女を解放するよう伝えた。解放された女は一瞬にして姿を消した。

「き、消えた！！ 若頭、誰なんですか？」

重慶は無言のまま立ち尽くしていると、奥の部屋から気配を感じ歩き出した。扉を開けると、その部屋には数十人の女がいた。全員が裸で酷く怯えている。

「とんだ悪趣味ですね……」

背後には李伯が立っていた。亞門会を掃討し終えたようだ。この部屋には、隅々にまで卑猥な玩具が置かれていた。すると突然、重慶が語り始めた。

「俺達は世間の邪魔者だ……どんな行いをしようと決して受け入れられる事の無い十字架を背負っている。だが……己の道を貫き極める者だからこそ、俺達は極道と呼ばれる。帰る場所がある者は去れ、無い者は面倒を見てやるからついて来い……」

怯えていた女達は、一斉に安堵の表情を浮かべた。

「この腐った屋敷は今すぐ焼き払う。急いで全員屋敷から出る……」

屋敷に火が放たれ、中庭から一同はその様子を眺めていた。しばらくすると、女達が騒いでいるのに気づき組員が事情を聞いていた。

「若頭、4歳の子供がまだ屋敷の中にいるとの事で……」

重慶に報告しにきた組員の話を聞いた李伯が、女達に問いただした。

「何だと!? 何故一緒に連れ出さなかつたんだ?」

「布佐に見つからぬように隠し部屋に避難させていました……重慶様のお言葉の後に迎えに行つたのですが、そこにはすでに……零ちゃんは私達の宝なんです」

重慶は炎に包まれる屋敷へ無言のまま入つて行つてしまつた。

「あつ!! お前らすぐに火を消せ!!」

屋敷内に突入した重慶の姿を見た組員達は急いで消化活動を始めた。

た。

「くつ、火事で死ぬ奴の気持ちが少し分かつた氣がするぜ……。これで、その娘が居なかつたら……ピエロだな」

屋敷内は黒煙と炎に包まれている。予想以上の環境に重慶は戸惑っていた。最悪の事態が過ぎるが、送り狼に娘の居場所を託した。すると、解き放たれた送り狼が動き始める。最も火の手があがつている部屋へ向かつて行つた。

「生きているんだろうな……」

扉を蹴り破ると幼い少女が倒れていた。すぐに抱きかかえ、意識を確認する。

「よし、なんとか生きている。後は脱出だが……」

燃え盛る炎と黒煙で方向すらつかめない状況となっていた。その瞬間、部屋の天井が崩れ落ち二人を覆い隠した。

「まだかっ！！」

いつこうに進まない消火活動に李伯は苛立っていた。

「まずいな。時間的に見ても厳しいか……」

重慶が屋敷に入つてから20分程の時間が経っていた。呆然と燃え盛る屋敷を見上げていると、女達が騒ぎ始めている。目を向けると、全身炎に包まれた三人の火を一生懸命に消していた。李伯もすぐ駆け寄り火を消した。ぐつたりしている三人。意識が全く無い状態だ。

「（この女は……）すぐに『学』先生の元に連れて行くぞ！！」

重体の三人を急いで車に担ぎこみ、女達を乗せた数十台の車は燃え盛る布佐の屋敷を後にした。

第28話 刺青～少女～（前書き）

この作品はフィクションであり、実在する人物名、地名、団体等など一切関係ありませんのでご了承ください。

第28話 刺青 → 少女

江東区・診療所

規模こそ小さいが、庭付き平屋建ての建物がそこにはあった。どうみても、診療所とは見られない平凡な家である。しかし、姿を晦ますのには最適だった。その一室に大火傷を負った一人は寝かされている。

布佐の屋敷、襲撃事件から4日目。重慶は目を覚ました。

「……若頭が目覚めたぞおーーー！」

余りの嬉しさに組員達は大騒ぎしている。

「つるさいですよ。少し静かにしてなさい……学先生を……」

傍らに座っていた李伯も安堵の表情を浮かべている。間もなくして、学と呼ばれている白衣を着た男が姿を現した。

「気分はどうですか？」

「……（助かつたんだな）」

重慶は天井を見つめながら記憶を辿っていた。

「安心して下さい、少女の火傷は軽症です。きっとあなたが守つていたからでしょう……」

学は小さな庭で女達と無邪気に遊んでいた零を見て話していた。

「ぐつ……」

重慶は起き上がろうとするが体が動かない。

「まだ無理ですよ。あなたが一番重症なんですから……」

重慶はふと隣を見るとまだ女が眠っていた。学と一緒に話をする為、他の者達を部屋から出るように伝える。

「先生、その女の刺青を見ましたか？ 正直、俺はその刺青を見た時ゾッとしましたよ……」

「……私もです」

「ずっと架空の組織だと思つていました……」

「相当な大物が絡んでいるようですね」

世の中には、絶対に表に出してはいけない情報が存在する。その情報のみを取り扱う闇の諜報会社の存在が、裏の世界では噂されていた。過去に一度だけだが、裏社会にその機密情報と思われる物が流出した事があった。当時は何者かの悪戯と思われていた。そして、その情報の一つに爵位を意味しているかのよつた印の序列があった事を、重慶は思い出していた。

そして、女に刻まれた刺青はそれを意味しており、しかも組織最高の実力者に刻まれる印であった。

「その女が布佐ごときを調べに来たとは考えずらい」「おそらくあの娘が目的だったのでしょうか」「だが、その女は捕らえられていた……俺達が乗り込む前に誰かいたはずだ」

布佐を後ろ盾した黒幕の存在。最高実力者が動いた少女の正体。「俺の頭じゃ無理だ。段々眠くなつてきたな……」「今は体のことだけを考えて下さい」「とりあえず、その女が目覚めたら教えて下さい」

重慶は再び眠りに着いた。

2日後。

驚異的な回復力で、重慶は起き上がる」とぐらりと出来るようになつていた。

「若、若。お休みの所すいません」

「……ん、何だ？」

「今まで目覚めない重慶を、李伯はそつと起こした。

「あの女が消えました……」

隣を振り向くと、寝たきりだった女の姿がそこにはなかつた。そんなにすぐに動けるものかと、重慶は驚きの表情をしていた。しかし、すぐに少女の事を思い出した。

「……娘は？」

「おりますが……何か？」

「……（最重要目的の娘を置いたまま消えただと？）」

「あの女、寝た振りをして体力が全快するのを待っていたんでしょ
うね……」

「先生はどうした？」

「今朝早くから例の件で……」

学は月に数日、ある約束を守る為に診療所を留守にする事がある。

「それと娘のことについて女達から聞いた事ですが……」

「……なんだ？」

「出会つた時から、耳が聞こえていない様子らしいとの事で……」

「話すこともできない……か」

雲から何らかの情報を得ようと想っていたが、情報源を絶たれた。

ガチャ。雲と不安な表情を浮かべている女達が部屋に入ってきた。

「あ、あの、お体が大分良くなつたと聞きましたので……」

恐る恐る話し始める。

「お前達……雲は好きか？」

一齊に頷いた。

「雲をここへ……」

李伯はベッドに雲を連れてきた。女達は心配そうに見守っている。

「俺の声が聞こえるか？」

重慶は目を見て話しかけるが、雲はキヨトンとした表情で見上げている。その様子を見ていた重慶は、突然大きな両腕を広げ雲を抱きしめた。

「お前は俺の娘だ！」

おそらく言葉は聞こえていないだろう。だが、そのやさしい温もりに雲は微笑んだ。

「さて……帰るぞ……！」

雲を抱きかかえたまま立ち上がった。女達は不安そうな表情で重慶を見ている。

「お前達、雲の世話は任せるぞ……」

歓喜に沸く女達を連れ、重慶は診療所を後にした。

第29話 奇怪な出来事 ～女の戦い～（前書き）

この作品はフィクションであり、実在する人物名、地名、団体等など一切関係ありませんので、了承ください。

第29話 奇怪な出来事 ～女の戦い～

渋谷区・ハチ公前

曇り空の午後、香織は大慌てで待ち合わせ場所に向かつて行った。約束の場所で一人たたずんでいる凛の姿を発見すると、その速度は光と化した。

「遅くなつて、ごめんなさい…… お、お爺ちゃんに邪魔されて

……」

お洒落をしている姿を見られ、爺の突つ込みが激しかつた話をしている。それを聞いている凛は笑っていた。

「初めて来たけど、とても分かりやすかつたよ……」

ハチ公を見上げている凛は笑顔だ。

「そうでしょ。渋谷と言つたら、やつぱりここよね～」

二人はスクランブル交差点を渡り、楽しそうに109へと歩いて行つた。

渋谷区・センター街

数十年前はチーマーの聖地として知られていたセンター街。だが、ここ数年はコギャルに汚ギャル、センターGUYやギャル男にチヤラ男など、世にも奇妙な動物園と変貌を遂げていた。芸能スカウトなども多数混在しており、世間知らずのお人好しが後を絶たない。そして、それを力モにする悪徳者達が巢食つていた。

そんな去年の事である。夏希と名乗る当時16歳の少女が姿を現した。彼女は瞬く間にこの街を支配し、従わぬ者は容赦なく追放した。

程好く買い物を済ませた凜と香織は、お食事処を求めてセンター街へと向かつた。日が沈み始めた夕暮れ時である。しばらく歩いていると、二人はギャル男やらスカウト達の田に留まる。

「ねえーねえーお姉ちゃん達……今暇してなくなくない？」
「一人ともいいよー、綺麗だ。光り輝く原石だね、芸能界とかつて興味ある？」

しつこく付きまとわれるが、すべて無視して歩いている。その後も、ひつきりなしに声を掛けられる一人。ふと気がつくと、ひと気の無い場所まで歩いていた。

「……凄かつたね」

「うん、もううんざり。はあーお腹空いた……あれ、ここ何処！？」
香織は辺りを見回している。見知らぬ場所に来てしまったようだ。二人が来た道を戻ろうと、歩き出した時だつた。どこか身近な場所と思われるが、叫び声のような騒がしい声が聞こえてきた。

「悲鳴！？……やだ、何？」

「……行つてみよつ」

香織は気味が悪い表情を浮かべている。凜は声のする方向へと走り出した。

一人は広い更地へと辿り着き、異様な光景を田の当たりにする。宙を舞つている女を目掛け、数十人の男が石やら何やらと物を投げつけている。そして、数人だが倒れている男の姿も見えた。
仲裁に向かおうと走り出す一人。すると男達は呻き声をあげながら香織に襲い掛かつてきた。

「ちよ、ちよっと……！」

凜は香織の救出に向かおうとすると、妙な気配を感じ立ち止まつた。目の前をすさまじい風が通りすぎるのを感じ、宙に浮いている女を見上げた。

「いい勘してないじやない……これ以上、邪魔立てすると容赦しないわよ」

女は凛を見下している。

「凛さん！！ こつちは大丈夫だからその女を……」

香織は手当たり次第に周りの男達をぶつ飛ばしながら叫んでいる。

「火鳥扇！！」

火炎の扇が女へ向かう。

「鎌鼬！！」

火炎の扇が真つ二つに切り裂かれた。凛は驚いた表情で女を見上げ、身構えている。女の正体は、洋子であった。

「どうしても邪魔するというのね……死んでもらうわよ！！」

洋子は目を見開き、鎌鼬を連発している。凛は辛うじて避けながら反撃を試みるが、上空にいる敵に成す術が無かつた。その様子を見ていた香織が、援護に向かおうとした時だった。

「お前達、その3人を取り逃がすんじゃないよ！！」

男達に囲まれて姿が見えなかつたのか、突如聞こえた女の声に香織は驚いた表情で振り返つた。この街を支配している夏希であった。「何あの子……」「ギヤル？」

数十人の男達は一斉に三人に向かつて襲い掛かつて走り出した時だつた、下から突き上げるような大きな揺れが一同を襲う。余りの揺れの大きさに、全員が地面上に手をついた。

「じ、地震！？」

香織が叫んだ。しゃがみ込み、揺れが収まるのを待つている。

「ふふっ……そのまま動くんじゃないよ」

身動きが取れない連中に、洋子が襲いかかろうとしている。地響きが止み、地面が裂けるように割れ巨大なゴーレムが姿を現した。唖然とする一同。

「ゴーレム」 ユダヤ教の伝承に登場する自分で動く泥人形。

「グガゴ……ゴガゴ……」

ゴーレムは唸り声をあげている。

「……（標的は誰？）」

夏希は「ゴーレムを眺めながら考えていると、洋子が仕掛けた。

「鎌鼬！…」

凄まじい風に乗った刃が「ゴーレムを襲つた。だが、うつすりとした痕跡が残つただけだった。

「ゴーレムは大きな手で土を掘み、宙にいる洋子を掛けて投げつけた。土の礫をまともに喰らつた洋子は落下した。ゴーレムはゆっくりと洋子へ近づいて行く。

「ちよつと、助けなきや…！」

凛と香織が「ゴーレム立ち向かつていつた。

「（【体技：聖拳】）一段突！…」

「火鳥扇！…」

香織の打撃、凛の火撃をもろに受けるが全く怯まない。「ゴーレムは両腕を出鱈目に振り回し一人を弾き飛ばした。倒れ込む凛と香織。だが、その一瞬の時間稼ぎのお陰で、洋子は振り下ろされる拳を間一髪で避け、再び宙へ浮かんだ。

「……（操つている何者かが近くにいるはず、どう…）」

夏希は辺りを見回していると、ゴーレムは察知したかのように突進してきた。その隙に、洋子は姿を晦ました。

「うつ、お前達かかれ！…」

夏希の号令と共に一斉に襲い掛かる男達。しかし、あつけなく倒され、「ゴーレムが素早い動きで襲つてきた。

「きやあ！…」

かろいじて逃げるが徐々に追い詰められていく。凛と香織は動けないままだった。

第30話 奇怪な出来事～黄金の右腕～（前書き）

この作品はフィクションであり、実在する人物名、地名、団体等など一切関係ありませんので、了承ください。

第30話 奇怪な出来事 ～黄金の右腕～

渋谷区・某所

夏希はいつの間にか袋小路に追い詰められていた。背後にはフーンス、目の前にはゴーレムがゆっくりと近づいて来ている。何やら覚悟を決めたのか、右手を上げ振り下ろそうとした時だつた。

「呼んだかね？」

突然、頭上から聞こえた声に動きが止まる。恐る恐るフーンスの上を見上げると、背を向け仁王立ちしている何者かの姿があった。

「なんだコイツは！？」

夏希は嫌なアングルからその姿を見ているせいか、せっぱり訳が分からなくなっていた。

「……（あれ、どこかで見たよつな……）」

香織は立ち上がり、その姿を見て何かを思ひ出そうとしている。

「パンダマン！…」

凛は何故か嬉しそうに見ている。するとパンダマンが振り向きながら語り始めた。

「俺の名は“パンダマン”。平和とパンダをこよなく愛する……ぐわつ（最後まで聞けよ！…）」

ゴーレムの一撃を喰らってパンダマンはフーンスからぶつ飛んでいつた。

「えー！……だ、大丈夫なの？」

香織は飛ばされたパンダマンの姿を見て驚いている。状況は変わらず、夏希のピンチは続く。ゴーレムの振り上げた腕が襲つてきた。

「ぬんつ！……（なんてパワーだ）……早く……逃げる」

パンダマンは鬼熊に変身し両腕で受け止めていた。ゴーレムのパワーに全身がフルプルと震えている。夏希は咄嗟に逃げ出した。

「ぐがあーーー！」

叫び声と同時に、パンダマンはゴーレムの腕を弾き返した。

パンダマンとゴーレムの一身一体の攻防が続いている。見ている三人は各自考え事をしていた。

香織はそんなに遠い距離ではないし、『誠』を呼ぶか迷っている。夏希はパンダマンでは勝てないと思い、『麗』に連絡しようか迷っている。凜は先程から洋子の姿が見えない事に気づいた。

そんな三人を他所に、生身であるパンダマンに疲れの色が見え始めていた。

……ドゥルルルルルル。すると突然、更地に面した道路からエンジンを切る音が聞こえた。道路には一台のトラックが停車している。

「……（吾駒運送！）」

香織はトラックに書かれている会社名を見て目を見開いた。以前、『誠』から聞いたトラックの話を思い出したからだ。トラックから降りてきた男は、一直線にゴーレムに向かっている。その姿を三人は無言のまま見つめていた。

「（【潜在：シヴァ】）……（唸れ黄金の右腕）」

～シヴァ～ インド神話の破壊を司る神。

戦闘中にも係わらず、背後からの只ならぬ圧を感じたパンダマンは思わず振り返った。パンダマンを通り過ぎ、振りぬかれた男の一撃にゴーレムは跡形も無く碎け散った。啞然とするその場にいる者達。

張り詰めた静けさの中、男は三人に振り向いた。

「化け物は退治した。もう大丈夫だ、安心しなお嬢ちゃん達……」

三人はあんたが化け物だよつと言いたげな表情をしている。無視されたパンダマンは男に対して身構えていた。

「じゃーな。パンダマン……」

男はトラックに向かつて歩きながらパンダマンに声を掛けた。そして、何事も無かつたかのように行つて行った。

走り去るトラックを見つめ、立てぬへ廻っているパンダマンに凛と香織が歩み寄った。

「ありがとう。パンダマン」

「……ああ、いつぞやのお嬢さんですね」

「あ、あの、パンダマンさん。あの人とはお知り合いでですか?」

香織はトラック運転手の正体を確かめようと、勇気を振り絞つて訪ねた。

「本物かどうかは判りませんが、『一鉄』かも……いや、きっと本人だろう……」

実際にパンダマンも一鉄とは面識がない。何故自分の事を知っているのか不思議でならなかつた。

「……(まいっちゃんが出会つたおじさんつて……)」

「……(あれが最強伝説の男!!)」

夏希は会話を聞いていたのか、男の正体を知り何やら考えていた。

翌日。

香織は、昨日の出来事から色々と調べて貰おうと、従兄弟の涼に電話をしていく。

「もしもし、涼君

「ゴーレム……ですか?」

涼は鎌鼬の事件を思い浮かべ不吉な予感を抱いていた。

「最近になって奇怪な事件が多発しているみたいですので、気をつけて下さいね」

「えつ、奇怪な事件つて……」

とりあえず調べると言い残し、涼は電話を切つた。

第31話 縁結び～巫女～（前書き）

この作品はフィクションであり、実在する人物名、地名、団体等など一切関係ありませんのでご了承ください。

第31話 縁結び～巫女～

練馬区・Bar Change

翔はBar Changeを訪れていた。カウンター席に座り、終始二タニタしながら忙しそうに働いている径子を見ている。そして、径子が通りかかった時に声を掛けた。

「……おい。何かいい事でもあつただろ？」

翔の問いかけに微笑みだけを残し、径子は何も言わず立ち去つて行つた。その態度にやはり何かあつたと確信した翔は、カウンターでシェイカーを振つている昌也を見た。

「あー昌也ー！ 何か隠してるだろ？」

「は？ 隠すつて、何をだよ……」

翔は径子を指差した。

「見ろよあの顔。笑顔を通り越して気持ち悪いーぞー！ 親友として隠し事は良くないと思つぞ……」

「別に隠しこじじゃないけどよ……」

この前のデートで、縁結びで有名な巫女に会いに行つた事を話した。

「へつ……それだけ？」

「ああ、それだけだ。わざわざ伝えることじやないだろ」

昌也はグラスにカクテルを注いでいる。

「本当か？ その後一人でイチャイチャしてたんじや……」

勝手な想像を膨らまし、一人興奮している。

「それはいつもだ。問題ない……」

昌也は誇らしげに言い切つた。翔は羨ましい様な悔しい様な表情を浮かべていた。

「でもちよつと喜びすぎじやねーか？」

「女性にとつて好きな人と縁結びが出来たつて事はだな……」

縁結びについて話し始めた。翔はぽかーんとした表情をしている。

「まつたく……お前も同じ気持ちにさせてやろうか？」

「は？」

畠やは急にニタニタした表情で翔を見た。

「もしも、『凜』ちゃんと縁結びしてもうえたりどーよ……」

「……ぐうおおーああー！」

突拍子もない雄叫びに、ビクつとする店内の従業員と客。

「お、おい落ち着け。例えばの話だ……」

妄想して興奮状態の翔を必死でなだめている。

「……で、それはどこにあるんだ？」

「え、えーとだな……」

翔のギラついた目に押され、畠やはしようと場所と神社の名前を伝えた。

「なあ翔、まだそこは早すぎるんじゃ……」

翔は話を無視してあつといつ間に飛び出して行った。

「あつ翔さん、御代……」

品川区・某所

瞳はトレーディングを終え、ティータイムを満喫していた。手にしていたファッショソ雑誌を眺めてると、広告欄に田が止まった。そして、自然と携帯に手が伸びてくる。

「お久しぶりね。麗……」

「やあ瞳さん。トレーディングは順調ですか？」

「そうね順調よ。今度顔出しに行こうと思つていてるんだけど……」

「ありがとう」ぞいます。楽しみにしていますよ」

電話の相手は麗だった。意気投合したあの日以来、お互いを認め

合いながらも日々の生活に忙殺され、すれ違いが続いていた。

「それよりね、縁結びで有名な巫女の話つて知つてる？」

「ええ、知つてますよ……（先週行つた妖氣を感じる巫女の事かな？）」

「ねえ、それでね……あのね……」

電話越しに、自分から誘う事を躊躇している様子が窺えた。麗は女心を察し口を開く。

「一緒に行きましょう。いつ、お時間とれるんですか？」

「え、えと……」

一人の恋が、再び動き出そうとしていた。

文京区・音郷道場

自分の部屋で、『口』『口』しながら暇を持て余している香織。ふと携帯が目に入った。

「あつもしもし、凛さん……」

渋谷に買い物に行つた時の話に始まり、先日『誠』とのデートで縁結びをしてきた話をしている。

「いいなあ、香織ちゃん」

「あれ！？ 凜さんって、いい人いりんですか？」

「うん……」

凛の脳裏に『翔』が一瞬よぎった。

「ああーやつぱりいるんですね。凛さん綺麗だし可愛いもん

「え、えつ……いないよ」

「あーはいはい、わかりましたあ～」

香織はそう言いながら、神社の場所を教えている。

「だから本当にいらないんだつて……」

「一応ですよ一応。今後の為にね……」

その後も、一人の楽しい時間は続いていた。

第32話 縁結び～九尾の狐～（前書き）

この作品はフィクションであり、実在する人物名、地名、団体等など一切関係ありませんのでご了承ください。

第32話 縁結び～九尾の狐～

荒川区・尾日神社

月夜の晩、神社の離れにある古びた風呂場で入浴中の巫女。名前は結衣、19歳。ここ尾日神社の神主の娘である。

「（もお）また覗かれてる……」

神聖な大木から造られたと伝えられている風呂場は、建て替えることは勿論、隙間を修理する事すら許されていない。そんな事情を知つてか知らぬか、風呂場を囲むように覗き魔が出没する日々が続いていた。

「（しようがない人達だなあ）お仕置きですよ……（【操術：九尾の狐】）

「九尾の狐」9本の尻尾をもつ狐の妖怪。万単位の年月を生きた古狐が化生したものだと言われている。

「うわあーーー！……ひいーーー！」

風呂場の外に九尾の狐を出現させ、驚かせて追い払う日々。今日こそはと、着衣を済ませ父親の元へ向かつた。

「ねえお父さん。お風呂場どうにかなりませんか？」

結衣は迷惑顔で父親に話をしている。

「結衣、昔から言つてはいるが……」

あの風呂場は神聖なる場所で、代々聖女しか利用がゆるされない仕来たりを伝える。その話を何度も聞かされて育つた結衣はうんざりしていた。

「もう、いいです。私に何かあつても知りませんからね……」

「ははは、大丈夫だよ。その為に九尾の狐がいるんじゃないかな……」

拗ねた面持ちで話している結衣に、父親はあっけらかんと話をした。

「……じゃー以前行つた靖国神社のお手伝いは大丈夫なの？」

「あれも代々の行いだから大丈夫だよ」

「この家の代々の仕来たりだと結衣は諦めたようだ。」

「おやすみなさい」

「はい、おやすみ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3860y/>

悪がままに

2011年11月27日14時47分発行